

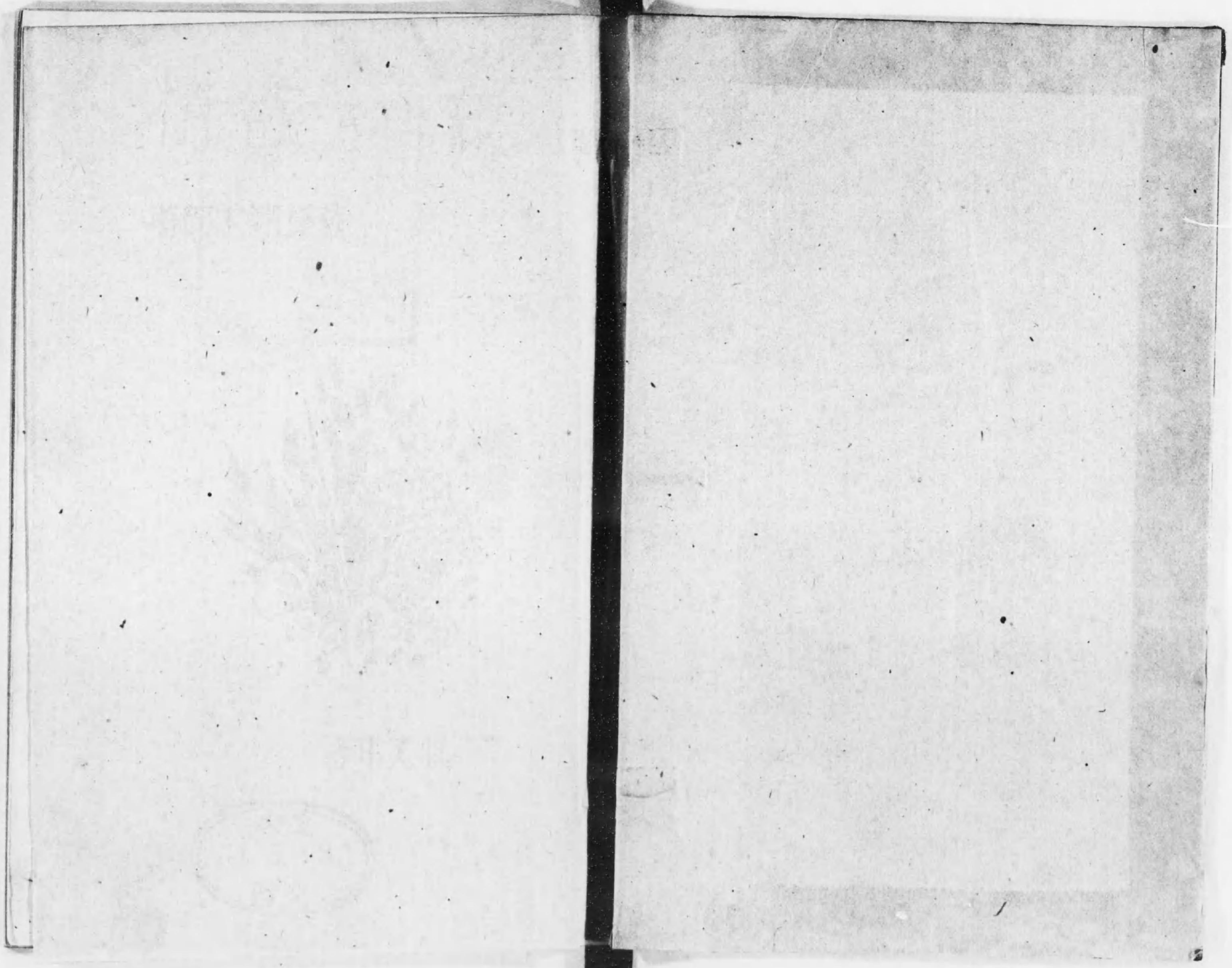
503

76



始



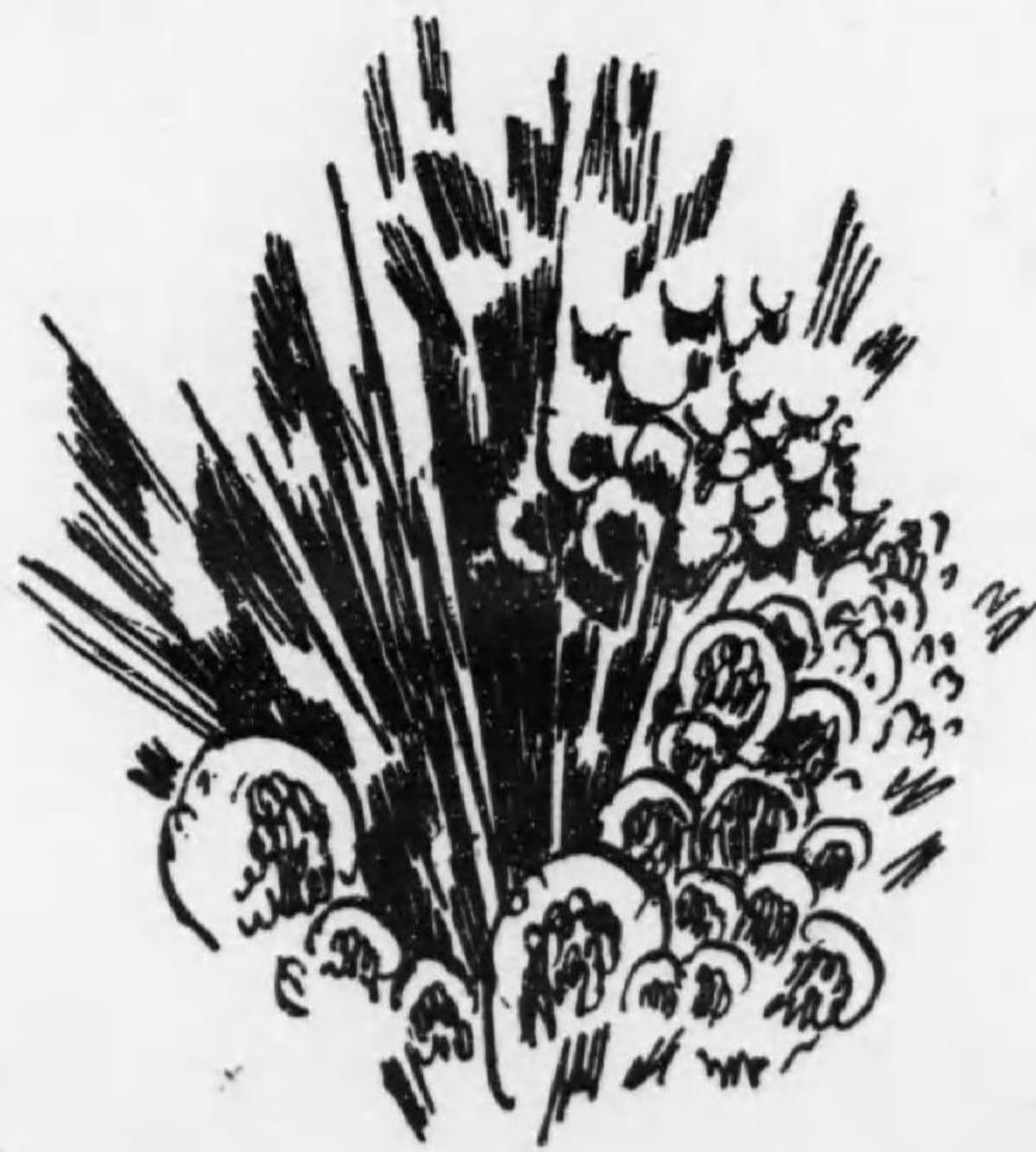
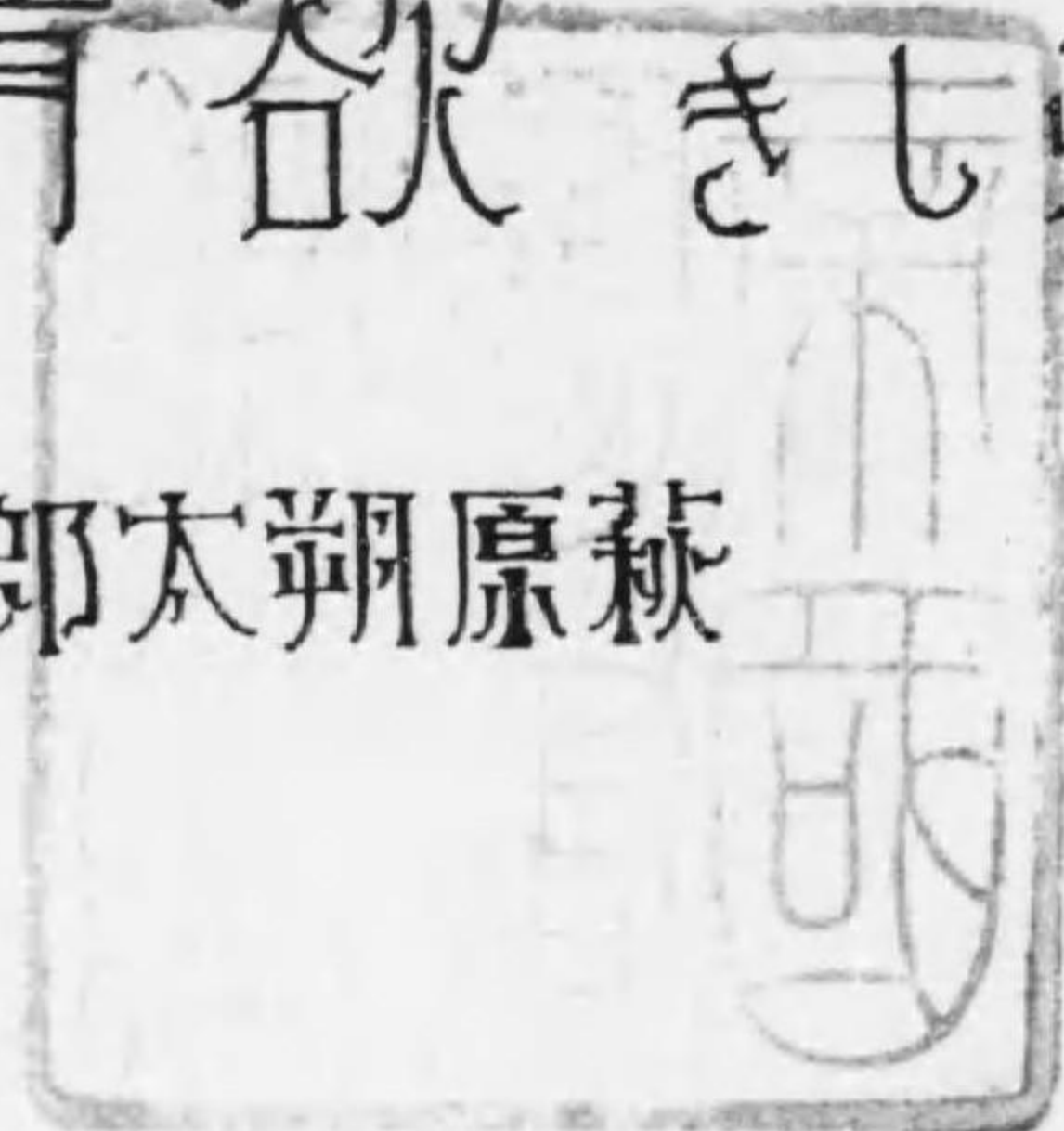


39

503-76

新 七 情 欲

萩原朔太郎



ア ル ス 刊



## 概 説

書銘の由來　この書物を「情調哲學」と名づけたわけは、それが論文でもなく、評論でもなく、感想でもなく、隨筆でもなく、全く一種特別のものであるから。といふよりも實際のことは、さうした類の名稱が私の氣に入らないからである。私の思想は——すくなくとも私自身の氣分に於て——論文とか評論とかいふやうな堅苦しい抽象的な名辭に適應しない。そんな者でなく、私はもつと情感の豊かな、叙情詩的の濕ほひのある、香氣の高い言葉を感じてゐる。とはいへ私はまた、どんな意味での感想や隨筆をも書きはしないだらう。感想といふやうな、隨筆といふやうな、そんな氣紛れ

な、閑つぶしな、思ひつきのやうな安つばい言葉。けにそんな思想は、私の生活のどこにだつてありはしない。私の思想は、丁度圓球の中心から放射する、あの張のある遠心力のやうなものだ。それは周邊に向つて、一樣に、多方面に突進する。それは平面上に書かれた直線の延長ではない。さういふ風に、一つの出發點から他の到達點にまで、順々に引かれた「系統ある説明」ではない。私はそんな平面的の方法を好まない。(思ふにそれは、説明としても極めて不完全なものであらう。)私はもつと立體的に、圓球的に、放射的にやつつける。だからそこでは、どんな平面的な系統もありはしない。一見それはばらばらであるやうに見える。しかも圓球の中心に於て、人格の意志に於て、一切の力が統一されてゐる。すべての思想はそこから放射され、四方に向つて一齊に突撃する。けに私は、どんな感想も、どんな隨筆も書きはしない。そんな斷片的な、中心のない、紙屑のやうな思想を書きはしない。

それ故もし許され得べくば、私の思想にまで、自ら散文詩と名づけたのである。その名辭ほど、自分の氣分にびつたりと適合するものはない。けれどもそこには、一つの内氣な遠慮がある。實際今日の詩壇で言はれてゐる散文詩とは、私の此所に書くやうなものでなく、もつとずつと暗示的で、節律の高い、つまり言へば叙情詩のいくぶんひき延ばされたやうなものを意味してゐる。だからこの意味での散文詩と言ひ得べく、私の表現はあまりに説明的で、且つ非節律的でありすぎる。況んやまた集中には全く純粹の評論と目すべきものすら混じてゐる。(集中◎印を附したものは純粹の評論であつて、他の作と少しく氣分を異にする。それは別著「詩の原理」から取つた者であるから、この書物の統一的氣分と調和しないのである。)そこで私は、あへて散文詩の名稱を遠慮してしまつた。そして結局最後に——あまり好ましくはなかつたが——この書銘「情調哲學」を選定したわけである。哲學といふ言葉の中に響く、理屈ばつた感

じが少し厭やであるが、それでもあの「論文」や「評論」や「隨筆」や「感想」やに比して、遙かにそれは私の氣分に近い。即ち私の思想の風光を、ある程度まで實景に近く打ち出して居る。

季節遅れの由來　この書物の中で、特に自然主義の藝術論に関する部分は、今から數年前、尙且つ自然主義の常識美學が聲高く絶叫されてゐた頃、私の押へきれない「時流への叛逆心」によつて書かれたものである。だから既に敵の影が薄くなつてしまつた今日では、もはやよほどにまで對手のない喧嘩であつて、公表の興味と刺激とを失つてゐる。明白に言へば、私は出版の季節を失つたのである。しかしこの季節遅れの思想も、また別の新しい精神に於て、新しい敵への義憤として爆發されるであらう。そしてその「新しい敵」といふのは、實に今日の時流をつくる幸福論やレアリズムの思想

であり、尙且つ自然主義末派の精神から胎胚された一切の現實的安易思想である。されば私をして、今日尙徹底的にまで「種の起元」を評價せしめよ。その美學とその人生觀のすべてを含めて。

常識美學の由來　この書物を一名「詩の原理への入門」と呼ぶ。それは書中に自著「詩の原理」中の重要な論文——「主觀と客觀」「藝術の二大系統」「叙情詩の本流はどこにあるか」「色情は藝術で有り得るか」等——を納めたばかりでなく、他にも藝術原論の根本問題に就いて隨所に意見を述べてゐるからである。すくなくともこの點に關していへば、この書物の内容は純然たる藝術哲學の根本問題（即ち詩の原理への入門）である。とはいへ勿論、この書物は體系ある思辨哲學ではない、それは直感に訴へる常識美學である。特に就中、過去のまた現在の文壇に流行する、「沒常識な常識美學」に贈

るべき、一つの好適な常識美學である。

書物の読み方　この書物は、いつでも讀者の手に觸れた所を開き、随意に眼の觸れた所から讀んでもらひたい。かくの如き書物にあつては、系統立つた通讀——最初の第一項から始めて最終の項にまで順々に讀んでくる仕方——は全く禁物である。けにこれは「通讀」さるべきものでない。これらの書物は、よき讀者にまで常に「翻讀」さるべきである。讀者は散歩の道すがら、また公園のベンチの上で、または海岸の砂丘の上で、どこでも諸君の手に觸れたページをひらき、さてまたすぐに巻を閉ぢて懐に入れるべきである。なぜならばそこには青空があり、囀る小鳥があり、そしてそこにこそ、私の思想の「最も悦ばしき解説」が知覺されるからだ。つまりいへば著者は、自然のかくはしい風光の中でのみ、ある未可知な「なにごと」かを讀者に語らうとするのである。

生活の二分野から　「詩人としての私」は、既に幾篇かの叙情詩によつて公表された。「思想家としての私」は、この書物によつて始めて世に出るのである。さればこの書物を始めて讀んだ人々は、思想家としての私が、いかに詩人としての私とちがつて居るか。言ひ代へれば、未だ敘情詩によつて發表されなかつた、私の他の半面に於ける生治と、その著しい特異性とを發見するであらう。けだし私の信條として、叙情詩に於ける理論的情操を許さない——それは詩の質的價値を低下されるから——ところから、詩によつては未だ言ひ得なかつた多くの情操を、ここに明白に書き得たのである。

目次

第一放射線  
第二放射線  
第三放射線  
第四放射線  
第五放射線

190	136	82	37	1
號	號	號	號	號
255	189	135	81	36
號	號	號	號	號

作品番號





第一放射線

序言

あつさりした冥想。息苦しい思想。性に関する事など。

作品番號

1

36

装幀

恩地孝四郎氏

## 讀者への挨拶

麗はしい朝の門口に於て、諸君にまで挨拶する所の隣人「お早う。好い天気ですな今日は。」といふにこやかな顔は、その場合として、何を言はうとするのであるか。そもそも彼の意志するところは、ただそれだけのつまらぬ事實。夜があけて朝がくる、そして今日の日和は見られる通りの晴天であるといふ、このお互にわかりきつた平凡無意味なる事實。ただそれだけのくだらぬ事實を報告するにすぎないのであらうか。若し我等の會話が、すべてさういふ意味で互に交換されるならば、人生に於ての表現——隣人から隣人への挨拶——が、いかに煩はしく、おほむね退屈にして迷惑千萬な仕事にすぎないであらうぞ。とはいへ然し、我等のどんな表現もさう

いふ報告的な意志によつて語られない。我等の門口に立つて朝の挨拶をする隣人は、實際に何を告げやうと欲してゐるのか。彼の正に言はふとする所は、實にあの「輝やかなしい朝の感情」ではないか。そんなにもじめじめした梅雨の後で、そして今朝の麗はしい太陽の輝やいてゐる空の下で、我等の生活にまで復活してくる一つの湧然たる力、この悦びにあふれた情緒、この晴々とした朝の気分、正に彼の言はふとして居るものは、すべてさういつた感情の告白に外ならない。O, it is fine to-day!

されば我等の言葉は、すべて我等の感情によつてのみ、気分によつてのみ、情慾によつてのみ語られる。けに「思想そのもの」は、我等の表現における符號にすぎないであらう。何故といつて我等の隣人にまで傳へやうとする者は、言葉が意味する概念の思想「今日は晴天である」といふ事柄でなくして、實はその内面における意向、正にその表白をよぎなくされてゐる情意の律動的な躍動にあるからである。我等の願ふ所

は、今朝のこの笑ましげな気分をいかにもして隣人にまで會得させ、共に共に幸福の情感を享樂しやうといふにある。そもそもそこに語られてある事實の如きは深く問ふべき仔細でない。それはただの符號である。よつて以てこの感情を傳へるための符號、感情から感情への無線電信に於ける符號にすぎないのだ。故に思想といふ電信の暗號は之れを受信者の言葉にまで、その情意生活にまで翻譯して、明らかに節奏を神經に感觸し得た時——彼自らその同じ悦びや、同じ悲しみや、同じ情調やを同感し得た時——始めてそれが生命ある者として律動する。換言すれば我等のすべての表現は——叙情詩であつても、小説であつても、まだ評論であつても、哲學であつても、——それが讀者にとつての「記述」でなく「説明」でなく、むしろ情感的に魅惑のある「詩」として讀まれた時、その時始めて完全に目的を果したのである。

されば讀者よ、いかにして私の欲情が諸君にまで挨拶されて行くか。この靈魂があ

の靈魂——あれらのおびただしい靈魂——にまで乗り移つて行くか。けだし、私の語り得る主旨は別にある。それは書物の表面にない。それは隠されたる思想の帷幕の陰影にある。けにただ少數の意地あしき瞳孔——書物の表面を見ないで書物の隠された裏面をのぞかうとするやうな、皮肉な意地あしき欲情によつて燃えてる瞳孔——だけが、よくその秘密を捉へるであらう。ここに諸君の意地あしき「理智」が、むしろ私の逆説に於てさへ抗辨されんことを。そこにはかの逆説的な賞讃者——あらゆる賞讃の辭を並べながら、内實では反對に侮辱の舌を出してゐる賞讃者。即ち彼の感情の反對を、彼の思想に於て諷刺して居るところの賢い人々。——すらあるからである。

(序言 その一)

### 新しき欲情

人々は新しい欲情を求めて居る。かつて何物かが、そこに有るべくして有ることのなかつたやうな、さういふ新しい欲情にかわいてゐる。それらの欲情は、我等の果敢ない幻想に於てすら、尙どんなに輝やかしい晝景を展開するであらう。されば未來は——遙かに來るべき未來は——我等にとつての怪奇な假象でなく、むしろあまりに立體的の實有である如く感じられる。この實有なる、しかし空想のできない時の運動は、さまざまの建築の様式に於て、またその意匠に於て、近く設計される萬國博覽會のやうに、世界の人心の目新しい興味となるであらう。けれどもその時がくるまで、我等は感情の「最も輝やかしい部分」を秘密にしておきたいと思ふ。今我等は椅子の下に眠り。そして建築の新しい様式を設計しやう。かつてどんな人々も夢想しなかつたやうな、そしてどんな人々も熱望して居るやうな、さうした一つの意匠に

就いて構想しやう。

けに我等は此所に眠り、そして暫らく過去を追憶しやうぢやないか。恐らくは我等にまで何かの悪夢であつたかも知れない所の過去について。いかに人々は長い間、その怪しい幻影に悩まされたか、今朝我等の床に於てさへ、尙且つ眩暈を感じさせる所の、あの一つの錯誤せる妄想に就いて。おおけに私は自然主義に就いて、あの啓蒙思想に就いてそれを言つて居るのだ。いかに人々は「啓蒙の啓蒙」といふ言葉を思議し得るか。この新奇な言葉について彼等は耳を慣らせる必要があるだらう。いかなれば彼等は、あのおびただしい誤謬について、あの驚くべき笑止なる、ふざけきつたる過去の啓蒙思想について、更にまた一つの新しい啓蒙思想を要求しなかつたか。現代は、さなり現代は、すべての古き啓蒙思想の新しき啓蒙時代である。それによつて強く踏みつけられ、踏みにぢられた一切の者——趣味や、道徳や、人道や、叙情詩や、戀愛

や、感傷や、快適や、そしてあらゆる文化的の精神や——は、今や水氣のある空氣の雨景に萌えつつある。それは悦ばしき季節の始に於て、まためぐり來る春のきざしである。さもあれ何物かの感情が、ひとりこの若草の野邊に立つて、未だ久しく慰さめられない愁を語らうと欲するか。ああ我等の肌寒い朝の薄明に、大いなる外套に身をつつんで、孤獨の寂しく彷徨する影を眺め入れよ。みよそこに勇敢なる、けなけなる孤立する精神がなかつたか。このあまりに浪漫的なもの、人間的なもの、民衆的のもの、人道的なもの、感傷的のもの、及び唯物主義な一切のものは、既にそれが現はれる前に於ての、豫感としての嫌厭を感じさせるほどにも、それほどにも氣位の高い、貴族的の「趣味」がそこに有りはしなかつたか。そしてまたあまりに貴族的なもの、古典的なもの、象徴的なもの、神秘的なもの、唯美的なもの、及び精神主義的な一切の者は、それが氣分として感じられる刹那に於てすら、既に既に反逆を叫ぶ所の、それほどに

も人間的な「感情」がそこにありはしなかつたか。けに我等の意地悪しき興味は、それらのあまりに人間的なる、若しくは人間的ならざる、すべての「趣味」とすべての「感情」とに同感し、且つ之れを賤辱し、批評し、諷刺し、擲論し、賞讃し、苦笑する所にある。されば我等は、それらの中のいかなる黨派にも味方しないであらう。およそあまりに時代的なるものは、その時代的なることによつて賤辱され、あまりに非時代的なるものは、その非時代的なることによつて賤辱される。およそ我等は現實的なる一切の者に反抗し、また現實的ならざる一切の者に反抗する。尙且つ我等は、その反抗に反抗しやうとする、一切の思想に向つて反抗しやうとさへ決心する。けに我等は固く決心する。過去の現實の、また古めかしき新しき、廢れたる流行してゐる、それらあらゆる思想の逆流をさかのぼつて、遠く眞實の沿岸にまで、我等自身の新しき風景を幻想することの固き希望を。

眞理！ ああそれは微風の如く吹いてくる情感の聲ではないか。我等の生活の濱邊にまで、海を渡つてくる熱風のやうに、情慾的な、情慾的な、精神への潮風ある刺戟ではないか。さればいかに逞ましき漁夫の健康が、いまその海邊に立つかを見よ。尙且つ人々は、かれの新しき欲情のために、なにもものかの幻覺する心像のために、絶えず砂丘を反對に走り、そしてあの輝やかしい白晝の海景に於ての、一つの巨大な木馬を跳躍する人物を見るであらう。——著者に於て。 (序言 その二)

## 3

## 指導者と追従者

あの家を壊してしまへ。この邊の風致を害するところの、あの流行遅れの家を壊してしまへ。それは喧號する群集の中では、いつも甚だ輕蔑され且

つ奇怪に聞える「最初の聲」である。しかしこの小さな、そして力にみちた聲は、だんだんと群集の中に行き渡ってくる。かつてはあんなにも輕蔑された者が、今では一つの流行的な輿論となり、むしろ時には衆愚の俗論とさへ思はれるやうになつてしまつたのだ。遂に日没が來た時、彼の先導者が立止つた。そこに彼はふりかへつて、彼の背後に展開するところの暮色を眺めた。その景色は荒寥として彼の心を傷ましくした。かつてはあんなにも立派に見えた古い屋敷が、今は趾方もなく破壊されてしまつて、見渡す限り茫茫とした草原の上では、彼の無趣味な追蹤者の群が、俗惡で騒々しい踊をつづけて居た。すべてそれらの光景は彼の心をいらさせ、彼の「以前の眺望」に對する床しい古雅の追憶と彼の「現實の眺望」に對する厭はしい反逆とを呼び起すに充分であつた。そこで彼の方角を代へた。指導者が、突然列の背後——今までは先登と見えて居た所の背後——から群集に向つて怒鳴りつけた。だれだ、あの古い家

を壊した奴らは。かつてはあの古風な家敷が、どんなにこの邊の風致を生かして居たか。それに今となつては、ああこんな殺風景な野景しか見られはしない!

## 4

危険人物!。「眞面目になる」といふことは、しばしば「憂鬱になる」といふことの外の、何のいい意味でもありはしない。——あの死に面接した人の顔をみよ。この世に於ての最も眞面目な顔をみよ。——あらゆる眞面目な精神の中には、一切の快適なものも失はれてゐる。機智や愛嬌や寛容やの、すべての悦ばしき徳が缺けてゐる。そして徳とは? ああ徳とは「悦ばしき精神」それ自體の總評ではないか。他人を悦ばしまた自分を悦ばす陽快の精神を外にして、どこにどんな善があり得るか。すべての

陰鬱な暗い心は、それ自ら悪への傾向ではないか。されば見よ、あの自ら徳をもたない陰鬱な人々が、いかに聲を大きくして「眞面目になれ」を絶叫するか。たとへば彼の教室に於ける女流道學者を見よ。そしてかの若く潑刺としてゐる生徒たちをみよ。後者に於ては、人生が一つの愉快な航海であり、あらゆる自然が愛と希望に輝やいてゐる如く思はれる。けれど彼等は未だ悪の感情を意識してゐない。そこで彼等若い青春の娘らにまで、人生はただむやみに可笑しく、やたらに可笑しく笑ひこけることの外は何物でも有り得ない。

けれども人生は、あの婚期を失つた老嬢の教師にまで、その全く反對の氣分をもつて眺められる。彼女は人生の悪い天氣だけを知つてゐる。悪だけを知りすぎてゐる。しかも不幸なるかな彼女は善に就いて——あの快晴な天氣に就いて——全く何事をも知り得ない。そしてそれ故に、ああいかに彼女の生徒が彼女にとつての忌々しい羨望であ

るか。見よ彼女は言ふ。「眞面目であれ。眞面目であれ。人生は遊戯ぢやない。浮調子の笑談でない。眞面目に。眞面目に。そして常に憂鬱な澁面づらに於てあれ。私自身の如く。」と。けに彼女は生徒の幸福を嫉妬してゐる。單に幸福ばかりでない。「徳」すらも嫉妬してゐるのである。

およそかくの如き道學者を警戒せよ。彼の仕事の目的は生徒に徳を教へるのでなくして、むしろその癩に障る幸福な奴らにまで、彼自身の不機嫌を傳染させよつて以て世界を陰鬱な曇天にしやうとするのである。換言すれば、彼は一般的な道德の假面にかくれて、彼自身の復讐を企てやうとするのである。危険人物！ しかしてまたかくの如き世の思想家を警戒せよ。我等に向つて常に「死の恐怖」を説くところの、そして常に「眞面目になれ」を強ゐるところの。然り、彼の説教の假面にかくれて彼自身の復讐を企てるところの宗・教・家・た・ち・を。



## 5

ミネルバの鼻 ミネルバの鼻は必しも哲學者の窓でばかり鳴くのではない。それはいつも「考へる人」の窓を暗くする。なぜといつて「考へる」といふことは、それ自ら人生を重苦しいものにする何かの重鬱性をもつてゐる。けに我々が思索に耽れば耽るほど、我々の生活に於ける香氣な陽快の部分——あの氣輕さや、道化さや、洒落や、輕口や、愉快さや、氣轉さや、——が失はれてしまふ。我々は黙り込み、氣むづかしくなり、そして何かの重苦しい憂鬱さに壓倒されてしまふ。つまりいへば我々は——それが哲學者の一般的範疇であるやうに——あの氣の利かない冥想的鈍暗の人物となつてしまふ。單に人物ばかりでなく、思想までが抽象的の鈍暗なものになつてし

まふ。そしてそれは、あらゆる精神の活潑な働らき——潑刺たる直感の躍動や、潑刺たる美の生氣や、——を殺してしまふであらう。即ち我々は何かの堅苦しい概念の木片になつてしまふ。そして要するに、それが所謂「真面目」になつたのである。されば「人生を真面目に考へる」といふ言葉は、畢竟するに「暗い闇夜」の重語命題トイトロコトではないか。願くはただ「真面目」だけに止めよ。でなければ「考へる」だけに。我々の生活をして、まことに暗黒に、暗黒に、闇を深くする勿れ。いかにミネルバの鼻のそこに鳴き居る。

## 6

輝やかしい心像 花のやうに美しい婦人を見る時、我等の心は謙遜になり羞かん

でくる。こんなにも憔悴な見る影もない我等の存在が、あの高慢の美の前に蹴落されてしまふ。まるで我等は、我等自らを卑屈な奴隷のやうに、まるで生甲斐のない劣等人種のやうに感じてくる。そしてこの厭はしい自己嫌忌は、しばしば決して外面の形容に止まらない。もつと内部にまで、我等の生活の全身にまで滲透してくるのだ。お私自身の小さな価値、尙且つ生きてゐるといふ価値は、唯々この一つの頭脳——そこには高貴な思想や趣味が宿つて居る——にだけあるのだ。その一つの取柄を除いて何と私は価値のない人間であるよ。しかもこの一つの頭脳さへ、彼女の肉體全體からくるそんなにも輝やかしい美の前では、光に曝された土鼠のやうで、どんなに見すばらしく色褪せてみえることぞ。しばしば私は、私自身の優越な自尊心をさへ失つてしまふ。勿論そこでは極力次のやうな自己辨明——すべての外面的な美は所詮皮相の価値しかないもの、眞の優秀な美は我等の人格的薰育によつてのみ価値づけられる者と

いふ自己辨明——を試みて居るにもかかはらず。されば抽象の議論は、町の巷路に於てすら、一つの輝やかしい心像を憎服するに足りないのだ。

7

熱風の後に あんなにも南國的な熱風が吹いた後では、いくぶん寒冷の季候さへも好ましく思はれる。——思索は情緒の悲しい追憶にすぎないから。

8

## 天邪鬼

天邪鬼の興味は、絶えず一般的の者に反對するといふことにある。既に

一般的となつてしまつた彼自身の思想や趣味に對してすら。

## 9

どんな天氣の日に追憶すべきか 過去を追憶し、古い記憶の抽出しを明けてみ

るといふことは、どんな天氣の日に於ても我等の機嫌を悪くするであらう。何故といつて、そこでは次のやうなデレンマが成立するから。我等の過去は、そのどこの一部分を抜き出してみても、自分の生涯に於て好ましいものか、又は好ましくないものかのどつちかで無ければならない。そこで若し「好ましい方」の部分を引き出して見たとすれば、どんなに今日の現實が呪はしく、今日の天氣が陰鬱に考へられることぞ。かつて過去に於ては、あんなにも明快な風景があり、あんなにも美しい青空があり、あんな

にも活々した青春の情緒があり、戀があり、希望があり、勇氣があり、そして正に大得意の自我がそこに微笑して居るではないか。然るに今日のこの現實は、何といふ陰氣な鬱陶しい天氣であらうぞ。あの美しい青空や、魅惑ある風景や、青春の若々しい感情や、そのあまりに詩的にすぎた戀物語やは、遠く時劫の向ふに消えてしまつて、もはや永遠に取りかへしのつかない夢となつてしまつた。そんなすばらしい幸福は、現在に於ても、また遠い未來に於ても、もはや決して決してめぐつて來ないであらう。ああ既に私は老ひてしまつた。といふ風な述懐——追憶の影に漂ふ哀愁——が、どんなに今の我等の心を寂しくし、現在の太陽を色褪せて見せることぞ。然るにもしさうでなく、我等の他の別の抽出し、即ち「好ましくない方」を引き出して見たとすれば、結果に於て、それが前よりずつと悪いことは言ふ迄もないであらう。過去の醜體を極めた自我、愚鈍と無智と輕率と野卑と猥瀆と失敗と羞恥とに充ちた自我、この二た目

と見られぬ醜體の過去に對して、我等の良心は顔を背け、熱病のやうな苦患を感ぜず居られない。そんな厭はしい過去の心像を眺めることは、鏡の中から自我の肖像を追ひ出し、どこかの人目に觸れない、たとへば宇宙のどこかに在るかも知れない「隠された時間」の第三次空へ消抹させやうとする努力のやうで、この上もなくいらだたしい悩みを感じさせる。それ故過去の追憶は、それが好い部分であるにせよ、悪い部分であるにせよ、何れにせよ、我等の今日の生活に憂愁の黒い影を漂渺させるであらう。とはいへこの兩刀論法は、すべての論客がよく知つてゐる「ヂレンマ破り」の方式によつて、また容易く破ることができるかも知れぬ。さういふ側の説を立てる人は言ふであらう。過去の追憶は、それが「好ましい方」の部分に於ても、また「好ましくない方」の部分に於ても、共に現在の自分にとつて楽しい者でなければならぬ。何故といふに、若しそれが「好ましくない方」の再現であつたにせよ、既に時のたつた記憶

は程のよいほ、かきを以て我等の眺望に距離をあたへる。——けに記憶としての苦痛は既に實際の苦痛ではなく、却つて何等かの甘味ある情想でさへもある。——我等はその離れた遠方の距離から眺める故に、どんな醜惡な厭はしい過去の景色でさへも、今の自分にはむしろ却つて懐かしみある幻想として、詩味に豊かな藝術的の氣分に於てすら觀照することができらう。況んやそれがさうでなく、他の「好ましい方」の追憶であつたならば、もつと一層容易に、一層酔心地のいい追憶氣分に浸ることができらう。だから追懷の抽出しは、どの部分をあげて見ても楽しいものである。どこの部分にも、我等の美しい情緒の夢が漂渺して居ると。

そこで結論は、この二つの同じ論法によつた正反對の議論の中、その何れが正しいかといふ判断であるが、この點に關して言へば、我等は「自我の日和」を見るより仕方がないであらう。だれも知る通り、雲行きの靜かな穏かな日や、涼しい爽やかな微

風が流れてゐるやうな日には、我等のすべての追懐は、あの青空に浮ぶ雲のやうで、いつかは楽しい幻想の、氣分の、情調の、夢の深い、一括して言へば詩的な美感の中に溶け込んでしまふ。所が之れに反して、雲行きの様かでない、曇天の重苦しい空の下では、どんな觀想もいらして一切が厭はしい實感の憂苦に感じられる。それでこそ人生に於ける秋の頃——そこでは思想が圓熟し、空は高く晴れて感情は靜かに流動してゐる——その秋の頃にこそ、我等の過去は收獲され、すべての生涯が善美に肯定されるのである。そしてあの暑苦しい人生の夏、落付きのない青春の焦燥と、烈日の熱に喘ぐ情慾の夏——に於ておほむねの過去が否定され、追懐は息苦しい悔恨となるであらう。されば我等の注意は、ひとへに今日の空模様をつつしむこと、悪しき空模様の下では夢々追懐の古い戸棚を開けないやうに心せよ。諸君が若し現在を愉快に、できるだけ苦痛なく過したいと願ふならば。

## 10

**思想と肉情** だれも自分の「思ひ」を聞いてくれる人がなく、またこつちから話しかけるほどの人も居ない時。つまり人が孤獨であるて感情のはげ口を失つてゐる時、我等は思想の過剰に苦しんでくる。あの配偶者をもたない獨身者が、いつも肉慾の過剰に悩んでゐるやうに。

## 11

**男としての義務** 男は彼の名譽のためにも、しばしば離婚せねばならぬ。

## 空想家としての男性

あの黒く濡んだ美しい瞳の奥には、どんな氣品の高い詩的な情感が宿つてゐることであらう。あの陽快な愛らしい微笑の影には、どんな明徹な思想が閃めいて居ることであらう。と男たちは空想する。しかし女たちは——特にさういふ美しい女たちは——すべての空想を排斥する。女たちは唯現實だけを、實利だけを知りすぎて居る。詩や、藝術や、思想や、眞理やは、かれらにとつて必要なもの、實生活以外のもの、遊戯的なもの、むしろ甚だしく輕蔑すべき類の者とは思はれない。美ですら、女の生命的趣味と言はれる美ですら、女たちにとつて實利以上の價值をもつては居ないのだ。みよ世間一般の女たちが、彼女自身の容貌や、

その粉飾や、衣裝や、身の廻りを飾る持物やに就いて、一括して言へば、彼女自身を賣物とする爲の美——そのあまりに實利的な美——について、いかに拔目のない商人的な趣味批判をもつてゐるか。しかも女性の生活と關係のないその他の非實用的な美についていかに彼等が冷淡なよそよそしい態度を見せるか。けに繪畫の展覽會における婦人らは、あの流行の風俗をした美人畫——それは彼等の處世術や粉裝術の最も好い参考になる——の前でしか、念入りに足を止めて見はしない。そして音樂會における婦人らは、旋律の興味よりは寧ろその競争者である同類の美的評價に熱中してゐる。何故といつて、彼女がその觀覽席に座つて居ることの最も重要な役目は、その群を壓した盛裝の輝やかしい魅惑によつて、廣く一般からその生活の保證者を物色し、且つその最上等の紳士を選択しやうといふ最も功利的な實用の目的にあるからだ。けに女たちは利口である。彼等は男たちのやうに、處世の實益と關係のない純粹の美的

享樂のために——そんな無益の遊戯のために——高い代價を拂つて藝術品の前に時間を浪費するやうな愚を學びはしない。さればこのあまりに現實主義で實利本位の婦人から見るならば、我々男たちの中での最も功利的な人物すらが、尙且つあまりに詩人肌で、あまりに實利に疎い愚かの空想家としか見えないであらう。

## 13

何が健全であるか 「健全な精神」といふ言葉は、それが一般的に言はれる意味では、いつも「實社會の實生活に適應する精神」を概念して居る。さればかの勤勉な官吏や、公務に熱心な爲政家や、職務に忠實な職工や、義勇奉公の念に厚い軍人や、實務に關して明哲な頭腦をもつて腕利きの實業家や、利殖を見るに敏感な商人や、常

識の發達してゐると言はれる社交的の紳士やは、すべて皆「健全な精神」の所有者と見られてゐる。そしてまた政府の規定した國體方針に都合の好い説を抱いてゐる學者や、**現在せる社會の風俗人情**と戻らないやうな趣味思想を持つてゐる藝術家や、すべて實社會の實生活に適應する學說と趣味の一般は、同じくまた「健全な精神」の現れと考へられて居る。そして之れに反する一切の者は、すべて皆不健全な精神、危険な思想、病的な趣味と目されるのである。さればすべての獨創ある藝術家や、時流に媚びない眞の思想家は、いつの時代に於ても社會から不健全と認められる。何故といつて彼等の本務は、常に新しい文化の世界を建設し、併せて古い因襲の生活を破壊するにある。したがつてその精神は、多くの場合に於て現在せる實社會の風俗習慣と背馳する。つまり本質的に言つて、さうした人々の意慾が「現在せる實社會の實生活」に適應しないのである。

さてそれでは「健全な肉體」とは何の謂か。それも矢張「實社會の實生活に適應する肉體」を言ふ者に外ならない。たとへば醫者のいふ健全なる神經系統とは、實社會の實務をとる上に於て、何の不都合な故障も生じない、且つまた現存せる社會の風俗、人情、習慣、法則等に都合よく順應する働きをもつた、一括して言へば、實社會に於て生活するに適應した心理作用を營む神經の状態を指して居る。されば之れに反し、ある一部の特種な能力——しかも實生活にあまり關係のない特種な能力——ばかりが発育して、他のもつと實用的な感官機關が畏縮してゐる天才者流や、社會の法規を保ち犯罪行爲を防ぐ上に最も必要な意志の抑制力が減殺して、他方に空想的な心像ばかりが活々と幻覺される類の人々や、または一切の常態的な心意作用が消耗して、ただ一種の靈感的直覺能力ばかりが盛んに躍動するやうな人々は、すべて醫者の所謂變質者、狂人、若しくは神經衰弱者である。けにさうした人々の肉體は——神經系統は

——實社會の實生活に適應しないであらう。しかも實生活以外の方面、たとへば藝術とか宗教とかの方面では、いかにしばしばその不健全な天才や狂人やが、そしてまた實に神經衰弱の病人やが、眞に驚嘆すべき異常な才能を啓示することであらう。更にかの肺病患者や梅毒患者やが、その病毒に犯された肉體の故を以て、却つて往々健康人以上の藝術的天分を發揮するのは普く世人の知る通りである。故にかの印度の冥想教従の如きは、絶食、菜食、その他の方法によつて故意に肉體を憔悴させることにより、よつて以て彼等の叡智を明徹にすべく試みてさへ居る程である。それ故にこそ、けに千古の眞理として「健全なる精神は健全なる肉體に宿る」であらう。みよかの實社會に於ける成功者を。あの實業家や、大富豪や、成金やの油ぎつた血色の好い顔と、その雄牛のやうに肥え太つた體質の一般的範疇を。そして見よ、本來の生活の落伍者たるべく運命づけられてゐるあの好人物の下級官吏や、天性實社會の生活に適應しな



い氣質をもつて生れた藝術家等やの、あの憔悴した瘠犬のやうな體質の一般的範疇を。けにこの自明な事實ほど、「健全なる肉體」と「健全なる精神」との密接な關係を語るものはない。

## 14

## 智慧の明暗

我等の自ら經驗する所によれば、日常生活に於て役立つ所の我等の神經中樞——即ち醫者の言ふ健全な神經——が、その作動を障害され、何等かの病的な變調を起した時に於て、不思議にも藝術上の天才的叡智が世界を白晝のやうに照し出して來る。思ふにベルグソンの説く如く、我等の通例常態に於ける神經系統は、全く現實世界の功利に關した實生活にのみ役立つ者であつて、非實用的な眞や美の觀照

には役に立たない者、その方面の智慧に至つては、之れと全然本質を別にした或る他の特種な神經が關與して居るにちがひない。されば何等かの故障によつて、前者がその不斷の強迫的作動を中止した時、後者は徐ろに意識の背後から、床しくも幽幻な月光を照し出すのではあるまいか。

## 15

## 小心者への同情として

絶えず異性の匂ひに戀ひ焦れながら、彼が小心であるばかりに之れまで一度も成功したことのないやうな「臆病な戀の探險者」に對しては、**耶穌の言つた訓戒——或は實際にその反對の文法であつたかも知れない訓戒——が、最もよく適應してゐる。**「その肉は願ふなれどもその心弱きなり。」

さてこの一つの訓戒が、あれらの世間體のよい小心な惡漢共——その心の中では、絶えず世の物慾に對する卑しい衝動を感じながら、そしてまた異性に對する姦淫の妄想を抱きながら、彼等がそれを實行なし得ないばかりに世間から誤つて高潔な人と呼ばれてゐる、あれらの有りふれた者共——に對して、いかに耶蘇らしい同情の深い調子を生じて響くことよ。

## 16

## 思想家に就いて誤解するな

いかに思想家が、いつでも彼の「主義」ばかりを言ふと思ふか。たとへば私の書物における各項が、どれでも皆私自身の人柄に合つた私自身の意見や熱望ばかりを主張したものとと思ふか。ああ迷惑にして世話のやける讀者

よ。諸君は小説をどう讀むか。一編の小説に現はれた幾人かの人物が、すべて皆一樣に作者の理想的性格を象徴した者と思ふか。勿論それらの人物は、どれも作者の性格から抽象された一部の人格にはちがひないだらう。(何故といつて、どんな小説家も自分の性格中に存在しない人格を描出することはできないから。)けれどもそれらの中には、作者自身にとつて甚だ願はしくないもの、むしろ彼の倫理學に於ける正面の惡漢であり、むしろ彼の統一された人格中に於ける異分子と見るべき者すらが描き出されて居るではないか。そしてこの事實は、同様にまた我等思想家の作品に於ても——。けに我等の書物の中では、明らかに著者に反對する一つの精神が、さかんに聲高く彼の眞實をしゃべつて居る。

## 17

## 求婚廣告の秘訣

私の妻としては、容貌の如き意に介しない。私はただ高貴な精神だけを望んでゐる。と彼自ら廣告をして歩き廻る未婚者たちよ。君等のやり方は有効でもあり、且つまた甚だ賢明である。何故といつて、第一君等の廣告は人間きがよく、君等自身の高貴な人格をしのばせるよすがになる。第二には、またその同じ原因によつて、多くの若い娘たちから憧憬され、よつて以て有望な候補者を數多くつくる利益がある。しかしてこの廣告の反面に於ける危険——實際に醜い女が來るかも知れないといふ危険——に關しては、先づ以て充分に安心して可なりである。君の馬鹿正直な御両親を除く外、どこにだつてこんな廣告を眞面目に信用する友人は居ないであらうから。(おお性慾以外の何が求婚の衝動となるか。)ばかりでなく候補者としての娘たちでさへも、内心では決してそれを信用して居ないのである。女たちは、先づその

點は關しての自信を充分確實にした上でなければ、どんな求婚廣告にも耳を借さないのであるから。そこで君の唯一の信用者である親たちであるが、之れすらも安心して好い理由がある。親たちはその息子の風變りな、むしろ感心ではあるが、あまりに小心で遠慮ぶかい願望に對して、大に憐憫の情を呼び起してくる。そしてこの憐憫と同情と、自己の快樂のためよりはむしろ家族の幸福のためを計らうとする息子の感心な心がけに對する敬服とからして、却つて息子自身の注文を裏切るやうな立派な花嫁——即ち世にも美しい婦人——を選定するやうになるであらう。だから未婚者よ。君らの狡猾な廣告は、實際に於て大に効能があるといふものだ。

## 週間説教

日の出から日没まで、絶えずしきりなしに天體の運行を観察してゐる天文學者にとつては、この地球が太陽の周圍を廻つて居るといふ學說上の事實が、單なる道理としてでなく、ほんとの感覺として、正に神經としてさう感じられるさうである。そこで我々もこの人生が愉快なものであり、太陽はいつも明るく、自然は智慧に輝やき、そして神は愛に充ちてゐるといふやうな當時大流行の樂天家の言ひ分を、こんなにも根氣よく毎日毎日聞かされて居たならば、遂にはそれが理屈でなしに、本當の神經として、正に「感情そのもの」として肯定されるやうになるかも知れない。つまり言へば、私自身もつとつと幸福の生涯に這入つて、その上にも當時の流行にふさはしいやうな樂天思想(人道主義や民衆主義)の叙情詩を作るやうにさへなり得るかも知れないと言ふのである。——一つの心地よい哄笑として。

## 藝術に於ける實感の必然性

かれの閉ぢ込めたアトリエで婦人の裸體畫を描いてゐる畫家の心の中に、少しも性的の實感が動いて居ないで、全く純粹の趣味性ばかりが、即ち「神々しい美術家の良心」だけが宿つて居るかといふことは、事實としても甚だ疑はしい。ばかりでなく、また實際にそんな「神々しい藝術」——「趣味だけの藝術」——は、効果に於て充分人を動かすことができないであらう。さうした純粹の美は、却つて人間味を缺く所から、眞に力強い情慾的の魅惑をもたないかも知れぬ。どんな藝術に於ても、ある程度までは實感の濁りが必要である。

## 意志のための飲酒

一般に人が酒をのむ目的は、心地のよい酩酊に入つて忘我の恍惚を楽しむにある。ところがある種の酒飲みは、飲酒によつて全く反対になる。彼等はやきつくやうになり、いらいらして、無鐵砲に意志を押し通さうとする。さういふ酩酊は恍惚と明らかに差別される。恍惚では現實の意識が弱つて夢幻的な永遠や實在の方へ魂をひきつけられる。所が反対の酔ひ方では、却つて現實の實感を刺激し、したがつて憤念や、復讐や、嫉みや、殺伐性やが強くなる。かういふ酔ひどれば、決して愉快な楽しいものではないのだ。しかし人々は、この仕方にて「勇氣をつける」と言つてゐる。——酒は意志を強くし人を無鐵砲にするから。そこで人々は、革命や、戦争や、破壊や、喧嘩や、暴れ込みや、人殺しやの犯罪を執行する前に、しばしば酒精の興奮劑を用ゐる必要を感じてゐる。——さて今日の世界は、明らかにこの種の不

愉快な、いらいらした刺激性の酔ひどれに充たされてゐる。地球のどこを見ても、樂しげで閑散な恍惚などはありはしない。藝術が忘我であつたり、實在であつたり、美であつたりしたのは、既に過去の夢となつてしまつた。今日ではどんな藝術も、もはや宣傳——革命や暴れ込みやに必要な宣傳——より外の目的を持つてはしない。そして叙情詩すらが、もはや我等に何の「聖き恍惚」をもあたへてくれないのだ。最も新しい解釋によれば、詩は人を夢幻の恍惚に導くものでなくして、却つて我等の現實的な意志を刺激し、我等の精神をいらだたせる者、むしろやけくそな革命の軍歌に類した者ではないか。けにそれは最も不愉快な、しかしながら「勇氣をつける」ための飲料として賣られて居る。

師に歸れ詩に歸れ 我等の見る所では、師はいつも詩人であり、弟子はいつも散文作家である。——プラトーンとアリストテレスの關係を、また基督とその弟子たちとの關係を見よ。そして一般に、第一世紀の思潮藝術と、之れが後繼者たる第二世紀以後の思潮藝術との關係を見よ。——それほど確かな事實はないだらう。何故といつて各の弟子たちは、師の人格の「全體」の中から、其の特種な「部分」に於ての自我を見つけ出す。言ひ代へれば、弟子たちは師を分析し、師の思想を平面上に演繹する。さればいかにポーロが耶蘇の性格に於ける意志の部分だけを高調したか。そして福音書の記者ヨハネが、いかにまたその叡智の方面だけを哲學的に宣傳したか。プラトーンがその師ソクラテスから傳承したもの、更にまたアリストテレスが師のプラトーンから傳承したもの、すべて皆之れと同様である。彼等は、彼等自身の性格に反

映した師の「部分」だけを詳細にする。そしてまたその點に於てだけは、確かに弟子が師に優れてゐる。——でなければ人文の進歩がない。——師の思想は、部分的に明晰でなかつた。その點では極めて曖昧な、大づかみの、象徴風の暗示しかなかつた。つまり言へば彼は全局的にそれを把握し、直感したのであつた。そして弟子たちは之れを分析し、部分的に演繹するのである。されば我等の知る如く、師はいつも詩人であり、弟子はいつも散文作家である。師はいつも藝術家として優れ、弟子はいつも科學者として優れて居る。——かくして時代は次々へと現實的事實の煩鎖な認識へ深入りするであらう。ああそこで遂に忘れて行く文化の母胎がありはしないか。我等をして今一度「師に歸れ」詩に歸れ」と叫ばしめよ。

二人の旅人 先づ以て詩が來るべき時代を豫感し、第一の黎明を暗示することなくば、どうして散文が第二の現實を演釋することができやう。されば散文は、常にその先立つ所の詩（散文の母胎）を分裂させ、之れを食ひ殺し、且つその神祕を現實の光に曝露して嘲笑しながら、一方に於て更にまた新しく來るべき第二の黎明に憧がれて居る。けに詩と散文とは、互に仲の悪い、しかも互に道案内の先達となる、二人の旅人の追ひつ追ひ越されつする道中の道行にも似たるかな。

## 23

趣味と實益 美の起元に就いて

藝術の起元が人間の遊戯本能にあるといふ説

は、古くから一般の美學者——特にシルレルなど——によつて稱へられて居る。この説は如何にも平凡であるが、我等のリズム運動などにおける本能上の嗜好から考へて、常識的にも承諾され得る得點がある。けれどもそこには、尙も少し平凡でないもの、もう少しひねくれた考案の起元説がありはしないか。おお我等はあの誤謬に充ちた啓蒙時代——自然主義時代——の美學を追憶しやう。彼等の時代に於て如何に「遊戯」といふ言葉が文壇から呪はれたか。「藝術は遊戯でない」といふ當時の人々の固き信念は、古き美學の起元説に對してすら、藝術的神聖の冒瀆を感じずに居られなかつた。そこでこそ彼等の間に喝采された一つの新案の起元説がある。曰く美の起元は實用にある。實生活の實益的・利便にあると。たしかに然してこの説には眞理がある。いかに趣味と實益との間に、ある不可思議な、むしろ全く思ひがけない因縁の結ばれて居ることよ。これは我等がああ官吏や軍人の風俗に於て見る事實である。彼等の社會に於て、彼等の

一般的な趣味性に於て、およそどんな風俗が好尚されると思ふか。あの嚴めしい上髭や、尊大らしい物言ひや、勿體ぶつた歩き方や、堂々として威權ある服装や、一括して言へば、いかにも軍人らしい、また官吏らしい、そして要するに人民を憎服させるに足るほどの威壓を示した風俗舉動が、その人々の趣味に於て此の上もなく美しく高貴に眺められるのである。そしてまたあの職工や労働者の仲間における所謂「粹な風俗」が如何な者であるかを諸君は知るか。あの印絆纏に紺の腹がけ股引をした意勢のいい職人たちの様子や、或は腰に拳銃をさして罽の廣い帽子を被つた逞ましいカウボーイの風俗やが、いかにその同じ社會の趣味に於て美的な者に觀賞されて居るか。さればそこには明らかに實益と趣味との密接な關係が示されて居る。彼等のさうした風俗舉動は勿論その職業を活潑にするための實益から尊ばれた者であらう。然るに後にはそれが全くさうした功利から獨立した純粹の美的好尚と變つてしまつてゐる。威權

のある上髭や、元氣の好い活潑な服装やは、軍人にとつても労働者にとつても、何等功利的の意義なしに、全く純粹の趣味として望ましいのである。しかもその當初の目的では、それが全く實益上から工風され、實利としてのみ尊重されたことを考へねばならぬ。同じやうに我等は、あの野蠻人の顔面に見る物凄い刺青——恐らくそれは人類の美意識に現はれた最初の表現であらう——の起因を推察することができる。その本來の目的は敵に對する恐喝であつた。そして後には純粹の美的鑑賞となつた。また彼等の武器に於ける裝飾、たとへば刀劍の柄などに見るギザギザの模様畫などからも、容易に實益と趣味との興味ある關係を推考することができるのである。

美の起元に關する實用説を證明するため——私をして自然主義の美學に忠實ならしめるため——更に今一つの鮮新な例を引證せしめよ。これを私は「惡の華」について語らうと思ふ。人の知る如く、博從や、無賴漢や、兇狀持ちや、不良少年やの仲間に



は、一種の特有なごろつき風俗がある。その風俗は、あらゆる點に於て社會の健全な趣味に反して居る。そこには何となく常識に戻るやうなもの、善良な風儀を亂すやうなもの、そして要するに社會の律氣な組合組織（法律や道義の制裁）を齒牙にもかけないといふやうな大膽不敵の見得がある。さればさうしたごろつき風俗は、世の小心で善良な紳士たちにとつて、それ自ら耐へがたく厭はしいものである上に、何等かの底氣味悪しき不安をさへ感じさせるであらう。しかもその「厭はしい風俗」の發明者が、尙その上にも彼等の意匠を加へて、しばしば腕や背中に刺青をしたり、その生々しい刀劍の疵跡をわざと見せびらかしたりする時に於て、我等律氣者の嫌惡は殆んどその極度を越えて一種の本能的な恐怖にまで變態してしまふ。所で無頼漢の方は豫じめそのことのあるのを豫期して居る。彼等の風俗が人々から嫌がられたり恐れられたりすればするほど、よつて以てその寄生虫的職業である強喝やゆすりに利便をあたへ

るわけである。この見地に於て、彼等の風俗は甚だ實利的な意義をもつた者と言はねばならぬ。けれども彼等自身の目的は、決してそんな功利を意識して居ない。あの兇惡な感じを仄めかす刺青や、物凄く向ふ疵や、不逞無頼な舉動や物言ひやは、彼等の仲間にあつて一つの純粹な美的鑑賞——言ふ所の惡黨趣味——となつて居る。つまり彼等の趣味から言へば、より太々しく、より毒々しく、より物凄く、より非常識的で、そして要するにより惡黨らしく見える所の風俗ほど、美の高い價值に於て憧憬されるのである。ここに「惡の華」がある、我等の江戸時代の藝術家によつて賢しくも鑑賞され、廣く歌舞伎劇の舞臺に取り入れられた特種の美。「惡の華」の珍奇な鑑賞がある。そしてまた此所にこそ、趣味と實益との最も興味ある相互關係が證言されて居る。さてすべて此等の事實は、我等にまで上述の美學を眞理として承諾させるであらうか。果して然らば美の起元——即ち藝術の起元——は、實生活の實益的利便から發生

した者であらうか。勿論既に述べた如く、そこには兩者の密接な関係がある。その限りに於てそれは疑ひを入れない事實であらう。しかも此の説には一つの根本的な誤謬がある。けだし我等の趣味が、趣味といふ非實利的な觀照が、之れと全く本質を別にする功利的な意慾から派生したと考へるほど大きな誤謬はないであらう。その特種ないないな風俗を悦ぶ職人と、その同じ風俗の實務上に於ける利便を考へる職人とは、明白に意識を別にして居るではないか。美を愛する心は、實利を意慾する心と全々最初から獨立して居る。兩者は本質的に關係のない二つの別々な存在である。そもそも上述の如き事實は、たまたま以て前者が後者の境遇にまで結びついた者にすぎない。——けに藝術家は、いかなる境遇の中にも美を創造し得るであらう。そしてあのおいやれな佛蘭西人等は、どんな窮迫した貧乏生活の中からも、尙且つ境邊に適はしい種類の粉裝美を發揮する。——確かに美を愛する心は、いかなる實用的外觀とも結合し

得るであらう。しかもその故を以て、前者の動因を後者に歸さうとするのは、鳥の卵から鳩の雛を豫想する以上に荒唐無稽の推憶ではないか。明白に言へば、美の起元は全然實益と關係がないのである。美は美として——恐らくはまた遊戯本能とも別の者として——原始に神から授けられた獨立自窓のもの、一切の實利的功利性を超越した一種特別の本能——それ自らのための本能——ではなかつたか。

この點を差別せよ 彼は該博な智識を持つてゐる。彼は「物知り」である。しかしながら、ああ けに彼は唯一つの「思想」すら持ち合せて居ない。

25

どこに美が見出される？ それらの無頼漢のごろつき風俗が、社會の常人にまで何故にしかく厭はしい醜惡と感ぜられるか。そして我々の藝術家の或る者にまで、何故にしかく魅惑ある特種な美——けに江戸時代の戯曲作家は「愚の華」としてそれを舞臺に上演した。そしてまた如何にその特種な趣味が彼の觀客を誘惑したか。——として鑑賞されるか。けだし常人がそれを厭嫌するのは、そこに彼等のカタギな常識生活をおびやかすもの、何かしら社會の安寧と秩序とを破る如き兇暴不逞の見得があり、それが彼等自身の生活感情を不安にするからである。然るに藝術家は、全くさうした社會上の功利を離れて、また彼自身の實生活に於ける利害關係を忘れて、したがつてまた何等不安の氣分を伴ふことなしに、即ち純粹の趣味として虚心にその風俗を

觀照するであらう。さればそこには——およそ如何なる自然の對象にさへも——必然的に一つの眞と美とが見出されずには居ない。「如何にして、どこに、美が見出されるか？」要は諸君の實生活を捨てよ。實生活に於ける一切の功利的感情を忘失せよ。

26

宮殿を拜して ある國では、宮殿があまりに民衆に近い所——街道に面してゐて

その窓からは王様が直々往來の民衆とお話しができるほど——にある。所がまたある國では、宮殿があまりに遠く民衆から離れた所にあつて、九重の奥雲深く容易に龍顔を拜し得ない。そこでこの二つの宮殿の中、何れが我々の感情に近いものであらうか。多くの人は言ふであらう。前者は近代的の宮殿であつて、後者はやや舊式な王城

であると。それは全く、前の仕方では人民が王様を愛するやうになり、後の仕方ではむしろ畏敬するやうになる。またさういふ二つの考案が、各の建築の意匠にさへ、前以て仕組まれてある筈だから。けれども我々が、皇室を畏敬すると愛敬するとかかはらず、つまりさういふ畏れ多い理屈をぬかして、ここに純粹の美的對象から、近代的宮殿に對する反對の趣味が唱へられはしないか。何故といつて、あの自動車の驀進する埃だらけの街頭に、我等の戴く尊權な宮殿を眺めるといふことは、何となく奥床しからぬ殺風景な風情を感じさせはしないか。それよりも九重の雲深く美しい松の生える所で、空に慶瑞の鶴が高く舞ふ所でこそ、いかに古雅にして優美なる歴史の古い追憶が——あのやんごとなき大宮人の生活と、その人々の貴族的な生活とによつて象徴された「過去の美しかりし時代」の夢の追憶が——物床しくも新しく忍ばれるではないか。と言ひ得る所の更に最も近代的な趣味——近代的な趣味に反對するほど、それ

ほど更に進んだ近代的な趣味——がそこに考へ得られはしないか。いかに反對黨の人々よ。君らが未來派の繪に見る都會の情景に美を感じるほどに、それほどにこの私の「調子外れの趣味」？ にまで美を感じ得ないと言ふのか。さらば君らは如何にしても繁華な街頭の民衆に近く、電車と自動車の衝突する白晝の上空に、あの最も近代的な宮殿の煉瓦造りを眺めたいと主張するか。けにそれほどまでに君等は宮城を「現實的なもの」に思ひたいのか。時代錯誤の人々よ。さばかり我等にまで「歴史的なもの」として追憶され、したがつてまた古雅の奥床しい風情をしのばせる古き昔の大内山を！ ともあれ我等をして松の梢をあふがしめよ。由緒も深い世界諸國の宮城をして、ひとへに街路の騷擾に遠く、靜かな月光の夢みる影にしのばしめよ。

**武士道的精神** 嵐のすんだ後では、そして既に偶像の倒れてしまつた後では、どんな勇者もその上更に崩壊の上を踏みつけやうとはしない。ばかりでなく、却つてその倒れた偶像に對し、人の好い同情と懺悔とを感ずるかも知れぬ。たとへば彼の手段があまりに極端で公平を失つて居たかも知れないといふやうな事について。そして就中氣の早い連中は、彼が勝利を豫感した刹那に於て、既にはや心の内は敵に對する愛でいつぱいになるかも知れぬ。何故といつて、どのやうな場合にも、勝色の見へ始めた多數の黨派に味方するといふのは男らしくない。そして既に形勢の良しくない非運な敵に向つて、この上の慘忍な追迫を企てるのは武士道的でない。けにそれは武士道的でない。

**調子に慣れる**

これは我等が押韻律(和歌や俳句やソネットや)の創作に於て經驗する所である。押韻の詩を作る人は、先づ以て定められたる詩の形式と格調とに猥ねばならぬ。詩の創作に當つて、一々言葉の語数を數へたり、シラブルの數を調べたりするやうなことで、どうして自由の感情が叙べられるか。先づ以て充分に古人の詩集をよみ、我等自身の節律を一定の詩的範疇に慣らしてしまへ。さらば我等の言葉は——感情は——所定の語調につれて自然と韻律的に浮んで來るであらう。けれどもこの練習は、詩の初學者によつて相應の骨折りと根氣とを要求する。彼等はまたその調子に慣れきつて居ない。そこで詩の形式と格調とは、彼等にとつてしばしば迷惑千萬な拘束と感じられる。若しそんな面倒くさい約束がなく、詩がもつと自由な形式で自

由な韻律に表現され得るならば、我等はどんなにか大膽で、且つどんなにか天才的に行動することが出来るであらう。と詩の初學者たちはだれも考へる。然るに詩の大家たちは、だれも皆その反對を考へる。何故といつて、彼等は既に詩の調子に猥れきつて居る。彼等は創作に際して語句を數へるやうな手數をしない。語句は自然と無意識に調子にあてはまつて行く。その有様は、我等の子供たちの唱つて居る出たらめの唱歌が、いつも無意識に一定の音樂的拍節に合つて行くやうな者だ。だから詩の定められたる格律は、彼等にとつてこの上もなく重寶なもの。それは何等自由を拘束する者でなくして、むしろ却つてそれなしには手も足も出ないもの、よつて以て彼等の詩想を調子よくすべらして行くリズムの軌道である。さてこの一つの事實は、我等にまで次の眞理を語るではないか。そもそも「自由」とは何ぞや。何が我々に自由と感ぜられるか。そして何が不自由と感ぜられるか。未だ充分に慣れきらない一切の者は、すべ

て我等らにまでの拘束であり不自由である。そして既に慣れきつてしまつた者は——我等自らがその主人となつてしまつた者は——それ自ら眞の自由ではないか。そこで、尙一つの眞實を附加して言へば、およそ束縛のない所に自由のある筈がないではないか。——おお絶對の自由とは何ぞや。我等が神でない限り、どこにそんな者が夢想されやうぞ。——されば熱烈なる「自由への意志」は、先づ以て調子に慣れねばならないだらう。社會の、風習の、環境の、生活の、一切の調子に慣れるべく、私自身を克服して學ばねばならないだらう。けに自由の獲得は、拘束への無條件の服従によつてのみ得られるか？ いかに二度、讀者よ。それが眞實であるか？

**圓球の中心から** 概念し得る思想の中には、一つの矛盾もあつてはならない。とかつて人々は信じて居た。あの古い時代の「平面上の思想家」たちは。けれども新しい時代の哲學者は、その眞理を圓球の中心に置いて、旋廻する遠心力の作用にまで、同時にばらばらに——ヘーゲルの辨證法の如く順次に連鎖的ではなく——前後左右相互矛盾の八方へ彼の個々の命題を打ち出さうといふ「立體内の思想家」にあつてはむしろ全くその反對を主張されるであらう。されば新時代の信仰は、正に次の如く訂正さるべきである。「矛盾なるが故に、我れ信ず。」

## 30

驚異

理性は非理性をすら論駁することができない。

## 31

終幕の感情

個人と個人と、黨派と黨派と、また時代と時代との間に於ける我等のすべての論争や言論やは、結局いつて「言葉」の定義と價值とに關する見解を争ふ者にすぎないだらう。(たとへば「生活とは何ぞや」といふ大議論に熱してゐる二つの黨派に就いて、一方ではその「生活」が單に生命を保持するための生涯を意味して居るのに、一方ではそれが冥想したり享樂したりする一生を意味してゐる。)そこで長い紛雜した要領を得ない議論——すべての議論は紛雜して要領を得ない。互に敵の思想の核心に觸れることができず、互にその「誤解」に就いてのみ誤解を重ねて行くからだ。——の後、漸くにして論議の中心點に觸れ合ふことのできた二人の敵は、今こそ

すべてを悟つた人の世にも飽氣ない顔を見合すであらう。「おお何と我等が愚かであつたよ。つまり言つて君と僕とは、單なる言葉の上での争ひをしたに過ぎなかつた。」ここに氣のぬけた終幕の感情がある。しかもその感情の張合ひなさに關はらず、いかに君等の一日の觀劇が有意義であつたことか。それこそ實に君等の論戰の序幕に於て豫期された結果の、その最も自然的な、正に筋書通りに運ばれて行つた完全無類の終曲ではなかつたか。およそこの種の二部樂曲に於て、どこに之れ以上の期待さるべき〇〇DAがあるか。何故といつて、人類の文化に於ける歴史の總勘定は、所詮「言葉」の定義に關する修正と、その價値の評價に關する相場表を上下することより外にないのだから。——だから論議する者よ。終幕の感情をつつしめ。その孤獨の寂しさを深く味へ。

**改譯された言葉** 時代の新しい趣味が、その價値感情が、絶えず我等の言葉を解譯する。さればその解譯された言葉に於て、だれが最初の處女演奏者で有り得るか？だれがその皮切りの鮮新な快感を恣いままにし得るものか？——詩人。

**慰められない孤獨**

若し私の思想が理解されないならば、それは私の説明の罪からではない。そして恐らく讀者の鈍感の罪からでもない。私を理解し得ない罪のすべては私自身のこの時代にある。反對に、若し私が理解され、喝采されたならば、名譽はすべてこの時代に歸するであらう。——その故に、その何れにせよ、私はいつも



寂しく不満である。

34

ああ固い氷を破つて

ああ固い氷を破つて突進する一つの寂しい帆船よ。あの

高く空にひるがへる浪の固體した印象から、その隔離した地方の物佗しい冬の光線から、あはれに煤ぼけて見える小さな黒い獵鯨船よ。孤獨な環境の海に漂泊する船の針路が、一つの鋭どい意志の尖角が、ああ如何に固い冬の氷を突き破つて爆進することよ。

◎性的趣味に関する疑問

「獸慾すらが美を好む」といふ諷刺は、いつも藝術に

對する意地の悪い冒瀆の感情として語られる。されば彼自身の研究の對象にまで、何等かの神聖な、しかも道義的な價值感情を附加せずには氣のすまない所の、あれらの一般的美學者たちは、いかにこの點を警戒し、この點に關してのみ、故意にそしらぬ顔で側見をしやうとするか、あだかもそれらの美が、最初から彼等の認識の對象に價して居なかつたやうに。即ちそれが純粹の美と言はるべきものではなく、何等か美以外の見知らぬ特種が存在であつたかのやうに。この知らばつくて居る人たちは。けれども藝術家たちは——美の認識者でなくして、美の表現者である所の人たちは——むしろ却つてそれほどに尊大でない。彼等の聰明な直感は——いつも必ず理智以上に聰明である直感は——早くもそこに何かの興味ある宿題を求めて居た。けに我等が異性の外貌から誘惑される特種的美感、よつて以てそれが情交の催春藥となる美感ほど

、そしてまたその美の價值や好惡を品評する我等の特種な趣味性(性的趣味)ほど、藝術哲學に於て不思議な謎を感じさせる者はないであらう。凡そ我等のいかなる理性があへてそれを美でないと言ひ得るものぞ。しかしてまたどんな早計な判断が、一概にそれを純粹の藝術的美意識と一樣視することができようぞ。若しそれがさうならば、それが本當の美であり、したがつてまたその好惡優劣を評價する性的趣味が、純粹の藝術的鑑賞に於ける趣味性と同一な本質の者であるならば、我等の健全な常識からいつて、あの助平たらしい妾狂ひの老人や、金錢の利慾以外何物も眼中になく、しかもただ婦人の容貌に關する美醜の鑑賞に於てのみ、特別に卓越した見識を示す所の女郎屋の主人や女衞に對してすら、尙且つ恭しく「趣味の高い人」「藝術的愛好心の強い人」といふ尊號を奉らねばならぬだらう。しかしてかくの如きは、我等の神聖なる藝術や、高貴なる趣味の名を穢す者ではないか。いかに尊大でないと自ら信ずる藝術

家も、この點に於てまで讓歩することができるかどうか。しかも尙且つ「我等以前の藝術家」は、當時の風潮に於て、藝術にまで、それがあまりに神聖でありすぎるよりは、むしろあまりに多く人間的でありすぎることを慾求した。そしてこの啓蒙的慾求の底には、いかなる性的實感さへも、尙且つ藝術の感情に取り入れようとする反道徳的、反趣味的の強い衝動をかくして居る。さればもう一度この問題について反省しよう。

すべての美學者の議論は、美の本質何ぞやといふ客觀的概念を定義することに於て各自に皆夫々異つた見解(形式說、合理說、感情移入說等)が主張される。しかも美の主觀的な心意を告白することに於て、だれも皆例外なく次の條件に一致してゐる。けだしそこには一種の漂渺たる現實を遊離する趣き、即ち魅惑や、恍惚や、忘我やがある。そこでは實生活の功利的慾望や、物慾的な實行意志や、エゴチスチックな所有

慾やが忘却される。すべて此等は美の主観上に於ける心意の條件であると彼等は説くのである。しかして我等藝術家の自ら知る所もまた實にこの通りである。我等のすべての藝術的衝動と、すべての藝術品の鑑賞とに於て、此等の心意條件は全く必然の者として感じられる。然るに獨り性的の美感だけは、ある點に於てその通りであり、そして或る點に於てその通りでない。いかにかの異性の美が、我等にまで力強い魅惑や、恍惚や、忘我やをあたへることぞ。そこには確かに美の條件である「現實を遊離する趣き」が感じられる。しかもその漂渺たる氣分のすぐ背後に於て、いかに物慾的な、實行的な、我慾的な欲情——對象を獨占して肉體上の烙印をあたへ、實感的な劣情をほしのままにむさばらうといふ欲情——が、最も醜劣な野獸の狂暴さを以て燃えついて居ることぞ。かくの如き心意は、自然の美や、藝術品の美の鑑賞に於て、我等が絶對に經驗しない所である。しかしながら性的美を藝術美から差別する最も有力な證據

は、藝術家自身の反省によつて最も當初に提出されねばならぬだらう。之れを先づ藝術家に聞かう。

すべての優秀な藝術家——價値の高い趣味の所有者——は、世俗の低い趣味で一般に「綺麗なもの」と言はれて居るやうな、さういふ有り觸れた通俗の美に對しては、賤辱と輕蔑との外、何の特別な興味も持つて居ないであらう。あの街頭の繪紙店に見るびかびかした極彩色の風景畫や、富豪の應接間に飾られてある華美でけばはしい金銀づくめの家具の如きは、殆んど彼の趣味の一顧にすら價しないであらう。しかもこの甚だ尊大な藝術家が、いかにしばしば通俗の綺麗な美人畫に對してのみ、彼の内密な例外的感興を寄せることぞ。なぜならばあの俗惡極まる、しかも通俗の意味でいつて此の上もなく美しい豊麗無比な美人畫の前にのみこつそりと——内心何かの羞恥を感じながら——暫し彼はその足を留めやうとするのか。この際、この一つのあは

かれたる事實に對して、すべての美術家は潔く白狀せねばならぬ。尙且つしかし君等の感情のある者がそれを否定しやうと願ふか。さればそれが畫かれたる美人でなくして、實物の肉體ある美人であつたらどうするか。あの劇場の廊下に於ける、あの花のやうに粉装された豊麗な婦人たちの前で、尙且つ君等はあへて言ひ得るか。

「ラフエロのマドンナを美しいと感ずる自分は、それほどにも含蓄の深い異性の容貌に魅惑を感じ得る自分は、此等の世間並の、何の含蓄もない、單に通俗の意味で綺麗だといふにすぎないやうな婦人等に關して、そもそも何の美的誘惑を感じ得るものぞ。すべては私にまで退怠である。」自ら欺くを止めよ。欺くを止めよ。正直の所を言へば君等の内心には、早くから次のやうな思想が浮んで居るのではないか。「これらの美しい者は——美しい繪は、美しい容貌は——勿論藝術と言ひ得る者でない。けに藝術的の美として、それは三文の價値すらないであらう。しかも藝術以外、純粹の趣味以外

、何かしらそこに特種の美、よつて以て自分を魅惑する特種の美がある。」然り。然り。そこには確かに特種の美、藝術ではなくして、尙且つむしろ藝術以上に我等を魅惑する特種の美がある。しかもまた果してさうか。果してそれが美學者や道學者——いかに世の道學者がその特種の美を賤辱するかを見よ。他のすべての美や趣味に就いては、充分理解のある尊敬を示すに關はらず。——の言ふ如く、自然の美や藝術の美と絶對に鑑賞の態度を差別さるべき者であるか。恐らくそこに尙且つ「否」といひ得る所の一つの別な理由が残されては居なかつたか。されば我等をして、單純に問題から斷念すべく、更にいまま少し執念深くあらしめよ。(次項、色情は藝術であり得るか。参照)

◎色情は藝術であり得るか　この問題を釋くための豫備として、先づ藝術哲學の常識を述べしめよ。藝術哲學の限界に於て、我等の生活から抽象された美の感情は、普通にむづかしく美意識、又は碎けて「美感」と呼ばれる。そして捨象された残りの感情は、前者に對して非美意識、又は當り前の言葉で「實感」と稱へられる。されば色情が藝術で有り得るか否かといふことは、それが美感で有り得るか、そして實感で有り得ないかといふことの考案に外ならない。(但し念のため注意しておくが、美感と實感との對稱は、全然區別された二種の感情の對立的關係を意味するのでない。それは勿論の話である。どんな種類の感情でも、我等の藝術的表現になり得ないと言ふやうな者は有りはしない。生活の一切は美の對象である。しかしその生活の全體が、いつも必ず表現の動機となるとは限らない。我等の創作は、その唯一部分だけを選択し、他の部分を捨象する。この場合にその選擇された部分は、我等にまで美感の對象として扱

はれたのである。そしてその殘された者が實感の對象である。つまり言へば、美感と實感との別は、同じ一つの對象、同じ一つの生活感情に對する我等自身の主觀の立て方、氣の持ち方一つでどつちにも定まつてくる。對象その者に別が有るわけではない。故にこの點からいへば、色慾が美感であるか實感であるかといふやうな疑問は本來意味をなさないであらう。どんな欲情でも、見方によれば美であり、見方によれば非美である。されば此所と言ふのは、色情が色情として我等自らに感じられた場合、全くそこに藝術的觀照を加へないで、性慾それ自身の實感として意識された場合を意味してゐる。けだしどんな感情でも、それが藝術的欲智によつて觀照された以上は、既にそれ自身の實際の感情、即ち實感とは異つた他の恍惚たる者——美感——に變つてしまふのであるから。拙著『詩の原理』參照。)思ふに色情は、それ自らの實感にして、同時にそれ自らの美感であるかも知れない。言ひ代へれば、すべての色情の昂進は、

必然的に我等をして恍惚たらしめる者、したがつてまた藝術の表現を思ひ立たせるやうな者であるかも知れない。何故といつて、一般に言はれる性的實感なるものは、同時にまた性的美感の名に於て呼ばれて居るではないか。

しかし我等をして、かかる抽象上の空虚な議論をさけしめよ。實際に於ていかにこの問題がしばしば紛亂した世論を呼び起すことぞ。たとへば或る種の裸體畫や小説やが、警察官によつて正に「實感の對象」と認められる時、そしてその故にまた非道徳的な者として罰責される時、一方の藝術家や世論やが、いかに之れに反對してその純粹なる「趣味の對象」であることを熱心に主張するか。果してすべての色情は「實感の對象」であるか「趣味の對象」であるか。けだしそこでは一概に言ひ盡せないものがある。元來人間の二大本能は、食慾と性慾との二つであつて、前者は専ら個體の保存に必要なもの、後者は主として種屬の繁盛に役立つ者である。したがつて前者

は本質的に利己的で、消極的で、且つ現金主義であり、後者は本質的に他愛的で、積極的で、且つ理想主義である。そこで一般生物の藝術的本能——藝術的本能在必しも人間にのみ限られた特種の者でないことは、少しく生物界の實狀に通ずる人のだれも知つてゐる所であらう。——が、他愛的、浪漫的の傾向をもつた色慾本能の一部に屬してゐるかも知れないといふことは、だれも普通に氣のつく所であらう。すくなくともこの考は、かの藝術の起元を遊戯本能に求める説や、實用の功利に求める説に比して、遙かに科學的、合理的であり、且つまた常識的でさへもある。何故といつて、すべての動物界の現象、たとへば孔雀の舞踏や、蟲の音楽やは、我等にまで明らかに「生物界一般」に普遍的な美意識の起元を語るからである。すくなくとも食慾と藝術慾とを明白に差別して考へ得るほどには、色慾と藝術慾とを差別することができないだらう。けだしそこには最も密接な、最も神祕的な關係がある。(人類の文化の最も原始的

な表現は、どの民族に於ても單純な俗諺としての戀愛叙情詩——それは同時に唱はるべき音樂であつた——に始まつて居る。戀愛は勿論直接の性慾ではないが、その最も手近い隣人である。

本來言へば、美感の伴はない色情、純粹の實感としての色情といふ者の有る筈がないではないか。すべての色情は、先づ異性の美に魅惑され、誘惑され、あの恍惚たる非我の快感——それが即ち美意識である——に酔はされた後、ついで起つてくる欲求、否むしろ美意識それ自身の中に含まれてゐる欲求である。だから嚴密に言ふならば、少くとも性の方面では、美感に對していふ實感といふ言葉が意味をなさないだらう。ここではいつも實感即美感であり、美感即實感である。言ひ代へれば、我等の「本能さながら」がそれ自ら「藝術さながら」である。さればここで不思議なことは、世間で普通に言ふ意味での實感、あの一種非倫理的な、何がなし猥瀆の感じを生じて聞え

る世俗語の實感が、その實眞の性的實感を指すのでなく、他の性質のちがつた或る者を指して居ることである。たとへば「この女たちの醜猥な風俗は實感を挑發する」といふ意味での實感は、決して色情そのものを指して居るのではないだらう。何故といつて、既に「醜い」とか「だらしが無い」とか「淫猥」とかいふ感じをあたへる印象は、それ自ら不愉快な嫌惡の情を呼び起すからして、却つて眞の色情を冷却させるばかりである。我等の色情は——他のすべての動物の色情と同じく——容貌の醜いもの、毛並の悪いもの、色艶の悪いもの、氣品のない野卑なもの、そして要するに「醜」といふ不快な印象をあたへる者を嫌つて、いつもその反對に於ける印象、よつて以て我等を魅惑し、我等を恍惚たる快感に導く所の「美」によつてのみ刺激される。けに美の誘因なしには、どんな色情も催春されはしないのである。さればかの警察官等の言ふ意味で實感、即ち「醜猥にして厭ふべき感じ」を起させる所の印象は、その實何等

色情を誘發するものでなく、却つて我等の色情を冷却させ、その不快な印象から顔を背けさせる類の者ではないか。若しそれを罰すべき理由があるならば、それが「色情を誘發する」からではなく、他の全くそれと別な道義上の理由からでなければならぬ。しかし勿論、美を鑑賞するものは個人の趣味性であり、趣味性は各自の教養や品性や人格やの高下によつてその階級を別にするからして、我等の見て眞に淫猥唾棄すべしと感ずるやうな醜惡の風俗も、もつと教養のない品性の低い人々からは、却つて魅惑のある美しい風俗と感ぜられ、したがつてその色情の望ましい對象となるかも知れない。故にある種の淫猥な風俗に對して、之れを「厭ふべきもの」と判断した警察官は、すくなくともそれに魅惑され、それに美を感じた所の野卑な人々に比して、一層高尚な趣味と人格とを持つて居たのである。さうでなく、若し彼がそれに美を感じたとすれば——即ち色情を誘發されたとすれば——その對象は彼にとつての「厭ふべ

きもの」でなく、むしろ全く「好ましいもの」であつたにちがひない。かの藝術品としての裸體畫に對する官吏の態度も、全く之れと同様な心理による。かれらの常識的な趣味から見て、いかにそれが無様で、行儀の悪い、醜體を極めたしかも薄ぎたない油繪具で、と塗りつけられた「厭ふべき裸女」であるか。けにそれは彼等にとつて醜猥唾棄すべき印象、よつて以てその公表を禁止すべき社會の胃潰的不潔ではないか。(この點に關して一般の人々は誤解してゐる。彼等は實際に、その繪が官吏の色情を挑發させた如く、それが爲にまた罰された如く考へて居る。諸君よ、それはあまりに官吏の趣味を買ひ彼つた推察ではないか。美を感ずることすらできない印象に、どうして色情の挑發される道理があらう。眞に色情を動かして居る者は、むしろ實際に藝術家の側にあるかも知れない。諸君は反對を考へて居る。)

要するにすべての色情は、主觀的にみて「美しい感じ」「好ましい感じ」である。世



に「醜い色情」や「厭ふべき色情」の有る筈がないではないか。かの動物園に居る狒々が、公衆の前で恥づべき動作をするのを見る時、我等の心に感ずるのは、即ち「淫猥にして厭ふべき」醜惡の實感である。しかもそれは決して「醜い色情」ではない。けにそこには色情を誘發さるべき何の美感もありはしない。我等は印象から顔を背け一種の腹立たしい道徳的の憤怒に於て、この醜猥なる冒瀆を罰責しようとする。かの不快にして淫猥なる印象を、我等自身、及び社會一般の前から隠蔽しようとする。そしてこの心理こそ、それ自ら、かの裸體畫に對する官吏の心理を語る者ではないか。然り、それが所謂「風俗壞亂」の律法に於ける精神である。知るべし風俗壞亂とは、よつて以て我等の「色情を挑發する」對象を罪惡として罰する爲の律法でなく——けにそれは罰さるべき何の惡事でもありはしない——むしろその反對に於ての律法、即ち我等の色情を神聖なる者として尊敬するの念からして、その醜惡なる「色情の冒

讀者」を憎惡し、我等にまで不快なる色情的不潔を感じさせる一切の存在を罰責しようとする律法であることを。

されば世俗の言ふ意味での實感は、その實色情的不潔を指すのであつて、實際の色情(性的快感)を指すのでない。實際の色情は、それ自ら實感であつて同時にまた美感であること、既に前に述べた通りである。それ故、もし藝術の本質中に一切の美感を含むことができるならば、すべての色情と色情的な者とは、それ自らの實感的表現に於てすら、既に完全な藝術であり得るだらう。たとへばかの春畫や淫本の類の如きその純粹なる實感的表現に於てすら、尙且つ一種の藝術で有り得ることができたらう。とはいへしかし、ここに至つて我等は容易にそれを肯定することができない。できないかも知れぬ。何故といつて、そこには一つの頑固な反對説——前項「性的趣味の疑問」を見よ——が有るからだ。この反對説を破るべく、更に新しい別な反省が要求

されるであらう。ここに二つの、互に反対の立場に立つ不満がある。もし普通的美學者等の説く如く、一切の性美(性的趣味の對象)が美として不純な者である故に、我等の藝術に於てその表現を禁じなければならぬといふやうな要求が、かりに我等にまで強制されたとすれば——そしてそれは曾て實際に、歐洲中世紀に於て基督教が藝術家に強制したのである——どんな藝術家の良心も、之れに對して痛切な反抗を叫ぶであらう。我等は言はふとする。何故に實感の表現が悪いか。何故に我等は純粹の趣味ばかりを描かねばならないか。ならないといふ理由がどこにあるか。むしろ却つてより切實な者が、より價值のある美が、我等の「實感そのもの」の中にありはしないか。すくなくとも性的場合に於てはと。然るに之れに反して、もしかの官憲が我等の裸體畫を非難するならば——一般に誤解されてゐる如くそれが色情を挑發するといふ理由によつて非難するならば——多くの藝術家は前と反対の態度をとるであらう。我等の

見る所によれば、それは何等實感を挑發する者でない。それは純然たる趣味である。肉情を混じらない純粹の美であると。されば藝術家の創作動機には、たしかに二つの要求が混じてゐる。一つは純粹の美的觀照であり、一つは肉情的の實感である。そしてこの両面の要求は、性美に關する一切の者であらう。即ち我等が異性の容貌から魅惑される者の中には、勿論充分以上の色情が働らいて居る。それは決して純粹の趣味——藝術品や自然美に對する如き純粹の趣味——ではない。けれどもまたそれはあながち純一の性慾ばかりでもない。そこには確かに肉情以外の純美的鑑賞が働らいて居る。その證據には、異性の容貌に關する批判が、いかにある程度までその人の人格的趣味性を示して居るか。たとへば品性の野卑な人々が、いかにしばしば野卑な容貌の婦人を好むか。そしてまた本來貴族的な趣味をもつた人が、またいかにさうした容貌の婦人を愛するか。さればそれは一概に決して本能的な趣味でない。それはそれ自らで高

尙な藝術的鑑賞である。それ故に我等の性的趣味なるものは、半面に於て充分本能的であると同時に、半面に於てまた充分藝術的である。即ち一概にそれを色情と呼ぶこともできず、一概にまた鑑賞的趣味と言ふこともできない。

かく考へてくるならば、我等に一種の快感をあたへる性的實感なる者は、之れをその二つの要素——本能的快感の部分。鑑賞的快感の部分。——に別けることができるであらう。勿論實際に於ては、兩者は常に混同して、互に一つの心意中に溶合して居るのであるから、かやうな分析は不自然であるが、單に抽象上の假定として見れば、それは當然許さるべき分類である。そしてこの分類が許される以上、もはやこの問題に關する一切の疑問は、容易に簡單に氷解することができる。今この二つの心意識の中、その一方が強く働らく場合と、他の一方が特に強く働らく場合とを想像せよ。かくの如きは、我等の生活に於て常に普通に有り得ることである。たとへば我等は、ある美

しい異性に對して、いつも強烈な情慾を刺激されるのに、他のある美しい異性に對しては、殆んど情慾らしい情慾すら感じない。しかもそれを「美しい」と感ずることに於ては、むしろ却つて時に後者の方が優れて居るではないか。この場合に於て、前者の濃艶な美は、我等にまでより多く本能的な性慾を昂奮させたのであり、後者の清楚な美は、むしろより多く鑑賞的な趣味の対象となつたのである。(しかし勿論後者の中にすら絶対に色情が混じて居ないことはない。ただ前者に比してそれがより尠ないと言ふ迄である。)されば此所に誰れが眞の美人で有り得るか。もし我等にまで充分強烈な色慾を挑發させ、尙且つその上に、その獸慾を壓倒するに足るほどの優秀な藝術的純美を感じさせる婦人が居たとすれば、それこそ眞に理想的な第一流の美人であらう。そしてこの種の婦人こそ、すべての藝術家が好んでモデルとする所の者ではないか。見よ希臘に於ける古代の優秀な彫刻を、そしてまた特に近代の巨匠ロダンの藝術を。彼等

の作品に於ての、あの肥えて逞ましい肉體、その丸々として美しい胴體、張りきつた乳房の胸像が、いかに性的の強烈な情慾を語つて居るか。確かにそこには、單なる趣味といふ以上の、ある特別に力強い魅惑がある。尙言ひ代へれば、純粹の趣味といふべく、あまりに肉感的で、あまりに現實的の強い力が感じられる。しかも我等は、それらの美術品に對して、決して肉慾の實感を挑發されることがない。何故ならば、そこには更にその實感以上の一層力強い美の魅惑、よつて以て我等をして純粹の藝術的恍惚にまで忘我させる所の、更に一層偉大な鑑賞美が示されて居るからである。かくの如きは獨り彫刻ばかりでなく、他のすべての優秀な性的藝術に於て、たとへばモーバツサンやトルストイの小説のある場面に於て、日本の古い萬葉集に現はれた性愛歌のある者に於て、我等が常に感ずる所である。そこでは確かに趣味でないもの、むしろ肉慾の實感そのものを強く高調したやうな者が現れて居る。しかもその場面に於てすら、尙

且つその實感を憎服するに足りる所の、一層強力な藝術的鑑賞の美感が主脈となつてゐる。そしてまた實にそれ有るがために、明らかにそれが春畫や淫本と差別される。

以上の例は、性美に於ける「美」の部分が、他の「性」の部分に打ち克つた場合、よつて以て藝術的鑑賞が獸慾の本能を壓倒した場合である。然るに之れに反して、反對に「性」の慾求が「美」の鑑賞以上に切實であつたならばどうか。この場合に於ては、もはやどんな藝術的表現も要求されないであらう。我等の肉體的欲望は、直ちに實行的な手段——抱擁、接吻、性交等——を選ぶであらう。即ちそれは、美の本質である「現實を遊離する漂渺の趣き」とは全く異つた實行的、我慾的、獸慾的な者となつてしまふ。ここに於てか我等は、前項「性的趣味の疑問」に提出した一切の懷疑を解決することができる。あのラフエロのマドンナに美を感じるほど、それほど高貴な趣味をもつた畫家が、一方では通俗の安つばい美人畫や、世間並の婦人に對して一種の内密な誘惑を

感じてゐるといふ事實は、元より何の不思議な疑問でもない。言ふ迄もなく、この場合に於ける畫家の態度には、明白に異つた二つの者がある。前の場合、ラフェロのマドンナに對して居る時の畫家は、殆んど純粹の藝術的美感によつて動かされて居るので、その性的美感の部分は全く之れに懣服されてゐる。(ラフェロの描いた異性美にさへ、絶対に性的の者が混じて居ないとは言へない。否大にそれが潜在して居る。)然るに後の場合、通俗の「綺麗なお嬢さん」に對して居る時の畫家の心意は、反對に性的本能の色情が強く衝動して鑑賞的美感の殆んど忘却されて居る状態にある。そこで彼の味つてゐる快感は「色情の艶かしい幸福」であつて、眞の藝術的享樂ではない。つまり彼は對象を藝術品としてでなく、一種の實感的な娛樂物として眺めて居るのである。(勿論この場合に於ても、鑑賞的美感の絶対に働らいて居ないことはない。對象の異性に對して何等かの美を認識しない以上は、どんな色情も誘發されはしないのだから。)だ

から後の場合に於てすらも、もしその對象の婦人が飛切り上等の美人であつたならば、畫家の態度は全く一變するかも知れない。つまり彼は對手を娛樂的に見ないで藝術的に見てくる。そして彼の畫布にまでその美を寫さうとするであらう。またもし彼が詩人であつたならば、その肉情的な實感、直ちに變じて戀愛といふ美感となり、そこに一篇の叙情詩が作られるかも知れぬ。ただ今の所で彼がそんな創作を思ひ立たないのは、そして單に「色情の艶かしい幸福」のみを意識してゐるのは、その異性の美がそれほどまでには——すべての肉感を美意識の中に溶解してしまふまでには——彼を深く魅惑しないからである。(さればあまり美しすぎる異性は、却つて色情的實感を挑發しないであらう。それは我々にまで寧ろ藝術的嘆賞の對象になる。すべての賣春婦はよくこの邊のこつを心得てゐる。彼等はその階級に屬する男たちの趣味以上に、あまりに遠く自分たちを美しくしない。)

要するに我等の色情そのものは、嚴重の觀察に於て性慾それ自身の直接の感情である性的實感(性的快感)と、よつて以てその肉情を誘發するための、言はば性慾への催春劑としての目的における性的美感(美的快感)との二つの要素から組織された感情である。しかして後者は、それ自らの本質に於ては、他の純粹なる藝術美感と全く同一なる非肉情的快感であるに關はらず、常にそれが一方の實感と結合され、その肉慾的快感(色情の艶かしい幸福)の氣分と混同して、一種の「半肉感半美感の混合的氣分」として感じられる故に、ここに我等の知る如き一般的の錯誤が生ずるのである。けにその限りに於ては——それが現實されたる混合物としての限りに於ては——確かに之れを藝術的の純美と差別せねばならないのだらう。さればこの點の觀察に於て、かの一部の美學者や道學者やの判別は全く正當である。(すべての快感はそれ自ら「美」であるといふやうな主張の誤つて居ることは言ふ迄もない。すべての美感は必然的に快感で

あるが、すべての快感は必しも美感でない。すくなくとも藝術的の美感でない。)しかも抽象上の分析に於て、性的快感と引き離された鑑賞の純美をそこに認める限り、そしてまた實際の場合に、それがしばしば立派な藝術品を創作する限り、性美は決して——それが肉的、實感的の者であるに關はらず——他の純美から隔離さるべき性質の者でない。畢竟するに一切の色情は、社會學者の所謂疑似性慾(美感と肉慾の中間物)である。色情それ自身の現はれに於ては、未だ必しもそれは眞の獸慾でない。そこにはよほどにまで高尚な趣味が加はつて居る。しかもそこから一步後へ退ぞかんか、それは純粹の肉慾となり、一步前へ進まんか、それは純粹の藝術となつて表現される。そこには實に危機一發の識域がある。

されば以上の事實は、我等の藝術的觀照に於ける、あの最も紛らはしい困難の判斷。何がどこまで藝術品(趣味の對象)であつて、何がどこまで性的快樂の娛樂物(實感の對

象)であるかを、容易に誤りなく決定させるであらう。たとへばある種の繪畫、文學、演藝、若しくは實物の異性等が、我等に對して多少の美を感じさせたにせよ、むしろその美意識以上に肉體的の衝動を感じさせ、より力強い性的の快感に——その幸福の浪の中に——我等自身を泳がせるならば、その對象は我等にとつての性的娛樂物である、それは明らかに眞の藝術でない。かの寄亭演藝や通俗の滑稽歌劇——そこでは殆んど全裸體の若い娘たちが、彼等の技藝に於てよりは、むしろその肉體の美に於て喝采されるべく、さやうな表情に於て舞踏してゐる。——は、我等にとつて確かに興味あるもの、むしろ或る意味に於て藝術以上に我等を魅惑する力をもつて居る。藝術から受ける美の享樂は、何がなし非現實的な、ある精神的な者であるのに、そこで享樂し得る幸福は、もつと遙かに肉情的で、現實的で、何がなし或る「確つかりとした捉へ所」のある、よほどにまで實感性の強い力をもつて迫つてくる。もし藝術の價値が、單にその

魅惑における快感の「量」によつて評價されるならば、この種の挑撥的な寄亭演藝は、遙かに他の高尚な者に優れて居ると言はねばならぬ。しかもその演藝が、そんなにまで我等を有頂天にさせ、そんなにまで我等をぞくぞくさせる由所の者は、決してその技藝、藝術の力にあるのではない。つまり言へばこの種の演藝は、その軽い氣の利いた美によつて我等の肉情を釣り出し、我等をして「色情の艶かしい幸福」の浪間に泳がせるのである。故にそれは決して藝術(趣味の對象)でない。それは單に愉快な娛樂物(實感の對象)である。然るに之れに反して、若しその對象が、よし或る程度までの性的實感を感じさせるにせよ、むしろそれ以上に優越な美が意識され、したがつてその實感は漂渺たる藝術的氣分の背後にかくれ、言はばある「夢の中に漂ふ肉情」とも言ふべき鑑賞の純美意識を味はさせる者であつたならば、それは勿論純粹の藝術品である。前に述べたロダンの藝術品の如き、その實に代表的な者と見るべきであらう。さて

ここに最後の、第三の者がある。今若しその対象が、我等にとつて何の美的恍惚をも感じさせることなく、したがつてまた何の色情的快感をも誘發することなく、むしろ却つて我等の色情を氷結させ、その印象から顔を背けしめる如き淫猥醜惡の感じをあたへる者があつたならばどうか。それが即ち前に述べた「風俗壞亂」の實體であつて、勿論それは趣味の対象たる藝術でもなく、また性的實感の対象たる娛樂でもない、即ちそれは社會の善良なる風俗を亂し、我等の道德的潔癖にまで耐へがたい不潔を感じさせる所の汚穢物——よつて以て蓋をすべき所の汚穢物——である。かの極めて下等な階級に屬する賣春婦の風俗や、野卑劣惡な文辭に充ちた或る種の印刷物や、むしろ一般により多く淫猥を感じさせる通俗の春畫、淫本の類や、公衆の目前における下劣な猥褻的行爲やは、すべて皆我等の趣味の批判に於ての風俗壞亂の事項に屬してゐる。といふ意味は、しばしばかの警察官や、道學者や、偏狂な宗教家等の趣味の批判に於て、

我等と全く別種の事項を發見するからである。即ち彼等の規定した風俗壞亂の事項の中には、上述の者の外、時にしばしばロダンの彫刻や、サロン出品の油畫や、モーパッサンの小説などが混入されて居る。そしてこの類の者は、我等の批判に於て何の厭ふべき色情的醜穢でもないのである。



## 第二放射線

心の偏屈なる傾向。

世間的の風俗、趣味、流行、氣質。

認識の黎明など。

作品番號

37

81

道德か。戀愛か。詩か。でなければ？ 「道德か。戀愛か。詩か。でなければ

酒か。ともあれ我等をして常に酔はしめよ。」とボトレエルが歌つた通り、あらゆる人間の情緒の中で、道德と戀愛ほど、それほど芳醇に人を酔はすものはない。そこでかの手つとり早い成功を目的とする藝術家——通俗小説や娛樂的演劇の作家——への秘訣は、できるだけ安價に、且つ高調的に、以上の二大情緒を取り扱ふにある。みよ彼等の作の中では、あんなにも善良で正直な人物が、あんなにも極悪で非道な悪玉のために、いつも理由のない迫害を受けてゐるではないか。そしてその一方には、何といふ濃厚な——菓子のように甘たらしい——愛の場面が展開してゐることだらう。實際それ

は旨く仕組まれてゐる。どんな娘たちにも、どんな紳士たちにも、またどんな勞働者たちにも向くやうに。よつて以て人類の普遍的な感傷性(人道的義憤と性愛的哀傷)を刺激し、彼等をして高翔せる藝術的陶醉の幸福を味はせるやうに。そしてかくの如きは、また實に一般の文學者——通俗作家ならぬ、あれらの尊大なる一般の文學者——たちの奸計ではないか。およそ浪漫主義の名に於て呼ばれる文學の中、それらの人道的ならぬ、若しくは戀愛的ならぬ、他の一つだに種異りの者がどこにあるか。けに浪漫主義とは、古よりして人道主義と戀愛主義との別名に外ならない。それ故にこそ、それがまた如何に普遍的であり、民衆的で有り得るか。ああされば獨り我等は、すでに久しく道德にも酔ひ得ず、また戀愛にも酔ひ得ないところの我等は、そしてまたそれらの表現である詩(藝術)にも酔ひ得ないところの我等は、尙且つしかも我等自身の浪漫主義者?たることを確く信じてゐる、我等は、そもそもまたどこに我等自身の陶醉

や幸福やを求めることができやうぞ。ここに我等はボトレエルと共に言はうとする。道德か。戀愛か。詩か。でなければ——ああ、でなければ遂に何物の幻影か。——ともあれ我等をして常に酔はしめよと。この孤獨なる、渴いてゐる感情が。

## 露臺に立ちて

あの勇氣づいた、馬鹿に元氣の好い男を見ろ。かれは成功したのか。敵に克つたのか。それともまた聖スタニスラスの十字章を授かつたのか。さうではない。彼自らの言ひふらした虚言を、今がた彼の友人から聞かされたのだ。といふツルゲネーフの散文詩は、我等の生活に於ける氣分を、日曜の朝のやうに涼しくする。それは我等が「どんな眞實をも信じないといふ信仰」に到着した日の黎明に於て、實際

に感ずるかも知れないと思ふ所の、あの種の爽快無比な幸福の氣分である。けれども讀者よ、これは或る秋の日の露臺の上で、私の翻譯した感情である。

39

何が自然的であるか 「自然にかへれ」と叫んだルツソオへの質問は、正に次の如くであつたらう。若しも肉食が、歐州人にとつての自然であるならば、印度人にとつての菜食が、何故に自然でないと云ひ得るか。若しも新しき時代の日本人——彼等は始から西洋風の教育を受けてゐる——にとつて、すべての外來思想が自然であると信じられるならば、過去の日本に成長した我等の老人たちにまで、それがしかく不自然に見えるといふことが、何故に自然的でないと云ひ得るか。も一つ言へば、すべて

の野蠻人にとつて、近親姦淫や裸體生活が自然であるならば、すべての文明人にとつてそれが自然でないと云ふことが、何故に自然でないと云ひ得るか。されば質問の要點はかうである。「何が、だれにとつて、いつ、どこで自然的であるか。」

40

月光を踏んで松影を斬る

月光を踏んで松影を斬る。熱烈なる、熱烈なる、か

の青年志士等の敘情詩は、今日に於てすら、尙どんなに我等の血を湧かすであらう、もしそれが世の劍舞屋によつて吟ぜられずして、あれらの「新しい主義の人々」によつて朗讀されるのを聞いたならば。

## 41

悪魔に憑かれた良心　彼の信ずる眞理を捨てないといふ罪によつて、宗教裁判の火刑臺に立たされた學者にまで、最後の説教を試むべく僧侶が問ふた。「かくても尙汝は、汝の良心に對して慚ぢないか。」否、良心に對して、私の良心の賞讃に對して、あくまで汝等の聖書を反駁する。」その時、大いなる憎惡の聲が群集によつてあけられた。「みよ、そこに憑かれたる良心がある。おお汝、悪魔の良心！」。さらば我等をして、時代の憑かれたる良心であらしめよ。それらの「時代的の道德」と、それらの「時代的の正義」の一切に叛逆する所の。尙且つかの少數なる権力者と、多數なるが故に権力ある「群集」のすべてに牙をむく所の。

## 42

正義はどこにあるか　正義はどこにあるか。正義は常に踏みつけられ虐けられた者の中にある。言ふを止めよ、正義は「正しき道理」の中にあると。さらば何時、どこで、だが、その「正しき」を判別し得るか。昨日の迫害された拿王黨がいかに正しく、今日の壓制された共和黨のいかにもまた正しきを悟り得ないか。けにそこには、どんな「時代の理性」もありはしない。我等はただ「時代の感情」を知る。常に踏みつけられ、虐けられたる、それらの少數にして力のない人々の正義を知る。彼等の主張の常になげなる由所を、またそれ故にこそ、それがいつも道理正しき由所を感ず。さて我等をして豫感せしめよ。いかに多くの影薄き正義がそこにあるか。かつては輝やかしい

正義であり、今は既に影の薄い正義であり、そして近き未來に於ては、正に正に憎むべき不義となるであらうところの。否々、今日只今に於てさへ、既に「多數者」となり、「輿論」となり「俗論」となり、尙且つ漸く現實に於ける「權力者」となり「迫害者」とさへ成らうとしつつある所の。そしてそれ故にまた次第に不義に傾きつつある所の、いかに一つの影薄き「時代的正義」がそこにあるか。されば我等の中での、最も氣の早い人々を警戒せよ。

43

疾風を突いて 時流と逆行して進む時ほど、それほど我等の内に正義の力を強く感ずることはない。

44

無職業者の悲哀 怠惰といふことは、かつて昔に於て、一つの典雅な貴族的の趣味であつた。そしてまた物質生活の實務——それが昔にあつては賤辱された——にたづさはらないといふことは、しばしばまた高貴な、尊敬すべき美德でさへもあつた。されば昔の無職業者は、その一つの名譽と自尊心のためにすら、甘んじて物質上の困窮に耐えしのんだ。然るにすべての世の中が——趣味の方でも道德の方でも——昔と正反對になつた今日の無職業者は、およそ三重の不幸によつて慘虐に惱まされる。第一には物質の不自由からと、第二には社會の非難や侮辱からと、そして第三には——それが最も悪い不幸である——怠惰や無職に對する「彼自身の良心」の苦々しい苛責が

らと。

## 45

## 氣位の高い人々

どんな種類の情緒にさへ酔はないと言つて高言する人々、藝術は勿論のこと、哲學さへも安價なセンチメンタルだといつて輕蔑する人々、さういふ高慢な、氣位の高い人々の典型を、先づ以て私はニイチエに見る。思ふに彼等は、果して何物にも酔つて居ないのであらうか。若しさうだとすれば、あの「彼自身の情緒」はどこから來たか。あれほどにも讀者を昂奮させ、高翔させ、そして全く陶醉させるところの彼自身のセンチメントは。明白なる事實として、その氣位の人々は、あの一種特別な酔心地——すてきに高翔的な、自家尊大的な、そしてこの上もなく浪漫的な酔心地

地——をさそふ所の情緒、あの權力感情に酔つぱらつて居るのではないか。自らを高しとし、自らを偉大なりとする所の、若しくはまたその偉大なる、英雄的なる、權力的なる者に歸依しやうとする所の、その最も高翔的な情熱に。そしてこの情熱こそ、我等が名づけてまた「獨逸的の情緒」と呼ぶものに外ならぬ。見よキルヒマン、カント、ヘーゲル等の哲學者、ゲーテ、シルレル、ニイチエ等の文學者、及び一切の獨逸的な音樂と、獨逸的な文化を貫流する、一つの光輝ある黑色の精神を。そのいかに重苦しく人を壓倒する如き、またそれによつて權力へ高翔する如き、リズムのがつしりとした、威風堂々たる、重厚にして冥想的なる、しかもまた甚だしく理想主義的、浪漫主義的精神を高調するところの、一つの雄大なる獨逸的の感情を見よや。さればあの傲慢なる——傲慢なるが故に世界から憎まれて居る——獨逸人等が、つねに米國人を罵つて安價な道德的感傷家と呼び、伊太利人、佛蘭西人を嘲笑して愚劣な女性的感

傷家と呼び、露西亞人を耶嚙して神祕的な空想感傷家と評し、獨り彼自ら「何物にも陶酔しない眞の素氣しんきの人」といふ尊大の自尊心を感じつつあるのは、事實の前に對しても、彼自身の氣狂ひじみた誇大的の感傷性に對しても、いささか以て滑稽の次第と言はねばならぬ。しかもこの滑稽の美感は、獨逸人らをして私にまで甚だ愛嬌ある、親しみ易い、尙且つ素朴志操の高潔な民族であることを思はせる。彼等が實際にさうである如く。そしてまた世のすべての「氣位の高い人々」がさうである如く。

## 46

## 探偵術の原理

暖爐の側で。 弟たちよ、君らはそれを本當にしてゐるのか。あのシヤロックホルムスが——科學的名探偵が——彼の推理によつて彼の結論に到達する

といふ話を。馬鹿な話さ、帽子に汚點しみがついてゐる、時計のメタルに眞珠が入つてゐる、それで以て彼がもと印度郵船會社の事務員であり、現に歐州航路の一等船員である、エス、エッチ、ハークレー氏であることを推論し得た？馬鹿な話さ！どんな推理の方式が、そんな單純な比論でもつてそんな複雑な結論を導き得るか、事實はかうぢやないか。彼が對手の人物を——と目見るや否や、一切の細事が分明に直感されてしまつた。どうして？何でもないさ、それが即ち普通のありふれた探偵術ぢやないか。それが所謂あの刑事的千里眼、すべての探偵がもつてゐるあの職掌柄の叡智ではないか。だからこの點から見てホルムスのやり口に何の新奇もありはしない。(始めに對手を犯人と直覺し、後に證據を集めにかかる。これが普通の探偵のやり口だ、そしてまたホルムス君の。)彼に就いての興味は、單にその刑事的千里眼が群をぬいて非凡であるといふにすぎないだらう。けれども待て、彼の著るしい特色が別にあるのだ。世の常の平凡な探



偵どもは、單に彼の *one* を直覺するといふことにだけ、何物かの祕密を豫感するといふことにだけ、それにだけ彼の興味と才能とをもつてゐる。しかも彼等は、彼等自身の千里眼的奇蹟について不思議を感じることはない。そこには彼等は「何故に」を問ふたことがない。だから彼等の直感した真理は、いつも單なる「虫の知らせ」にすぎないだらう。それは彼等自身にまでこつととしてわかつてゐる。しかも他人に向つてその理由——そもそも「何故に」「如何にして」彼がその最後の判断に到達し得たか——を語り得ない。精々のところ彼の語り得るものは、單にその場合の氣分——ああいふ氣分、かういふ氣分、——にすぎないのだ。

然るにホルムスの場合はさうでない。彼は直感によつて *one* を掴むと同時に、直ちにまたその直感の内容を分析し、且つ抽象し、そしてそれを體系ある推理の形式にまで概念づける。——それだ、我々が科學的悟性と呼ぶものは。——されば彼の説明を

きくとき、あだかも我々は、彼のさうした推理が正しく彼の結論を導いたかのやうに錯誤する。——錯誤させられる。——しかも事實はさうでない。あの帽子の汚點やステッキの泥やは、その事既に出来あがつてゐる命題（直感的把握）の中に含まれてゐる賓辭にすぎない、彼は單にそれを抽象し演繹するのみである。されば弟たちよ。ホルムスに就いて誤解するな。すべての探偵術はかくの如きものだ。それは全く純一な直感である。あの「何となく——氣がする」の虫の知らせであり、氣分として感じられるこつである。およそどんな理屈もどんな推理もそこに有り得ない。それらの分析的能力は別である。然りそれは探偵術と別である。そしてけにそれはまた藝術と藝術理論との別である。

47

ある哲學者の墓銘に 哲學者ファウストは遂に惡魔に誘惑された。彼は「眞」を求めたのか。否。「至善」をか。否。彼は青春と戀愛とを求めたのだ。——然り「美」の體験を！

48

## 自由職業に對する惡しき世評

社會の温健派である、あれらの「實着な紳士」たちは、すべての自由職業家——政治家や、代議士候補者や、思想家や、畫家や文學者や、

詩人や、——に對して、何がなし敬遠的な、もしくは輕蔑的な、ある面白からぬ嫌厭の感情をかくしてゐる。なぜならば此等の特種な人々は、その職業の選び方に於て既に世間並の風習をはづれてゐる。世間一般の風習では、職業が生活の目的になつてゐない。一般の場合職業は金錢のため、パンのための仕事であつて、言はば好ましからぬ——けれども生きるためには止むを得ない——「浮世の勞苦」の一つである。然るに藝術家や代議士やにあつては、職業がそれ自ら生活の目的であり至意義である。彼等は金錢のためやパンのために仕事をするのでなく、むしろ全く自我の興味のために、嗜好のためにするのである。即ち彼等にとつての職業は何ら「浮世の勞苦」でなくして、それ自らが愉快な自由の道樂仕事に外ならぬ。けに彼等の生活は、この點に於てあの道樂息子——女狂ひに夢中になつたり、球突きに凝つたりして、更に家計の實務を顧みない道樂息子——と同じことである。彼等は自我の氣の向いた時に氣の進んだ仕事ばかり

りする。そして自我に興味のない——即ちそれ自らが生活の目的とならない——仕事に對しては、全然ふりむいても見ないのである。

されば此等の自由職業家は、世間の風習を尊重する實着な紳士たちにとつて、何がなし常規をはづれた不眞面目の道樂者、人間としての當然の義務であるべき「浮世の仕事」を怠つてゐるのらくら者であるやうに思はれる。ばかりでなく、それによつて彼等はまた社會の健全な風習を亂し、すべての實着な仕事にみそをつけ、自分らカタギ者の安全な生活を破壊すべく、常に何かの不安な恐喝を陰謀してゐる不逞漢であるやうにさへも豫感される。然り、すべての自由職業家は、それがカタギでないといふ點に於てすらも、すでに博徒や無頼漢の一黨派と見なされてゐるのである。それほど社會の一般的風習を尊ぶ紳士たちの常識から判斷して。

### 對色と混色

そこには一つの別荘がある。青々とした湖水に近く、また新緑の山の中腹に、夢のやうな白亜の別荘がある。そしてみよ、そこにはまた一つの別な別荘がある。閑靜な田舎の徑路に、または谿谷に望む幽地に陰見して、風雅な枝折戸を閉じた別荘、いかにも「自然そのもの」の素野な情景にふさはしい別荘がある。さて我等はそれらの別荘から、明らかに二つの別な感情を味ふことができるであらう。かの「青色の自然」に對して「白色の家屋」を反映させる西洋人の感情と、「落葉色の自然」に對して同じく「落葉色の家屋」を造り、沈鬱した田舎の氣分の中で同じく沈鬱した閑靜な氣分を愛する日本人の感情とを。けに前者の趣味は自然を逆に反映することによつて、

自然と人生の對色を夢むのであり、後者の趣味は自然に融合し混色することによつて、自然への完全な隷屬を願ふのである。されば前者の配色では、人間的色調を強烈にすることによつて、いよいよ自然との調和を鮮明にするに反し、後者の意匠では、人間的色調を稀薄にすることによつて、いよいよ對象との融合を完全にすることができらるであらう。けにさうした後者の感情には、自然に絶對的服從のしほらしき——消えも入らばやの風情——がある。

## レオナルド・ダ・キンチ

靈感にうたれた僧侶が、高い教壇の上から火のやうに燃えあがつて叫んだ。そして聴衆は彼等の感動の最高潮に於て、一樣に涕泣し、絶

叫し、畏縮し、殆んど昏倒するまでになつてしまつた。この異常なる、恐ろしく高壓した空氣の中で、レオナルドは唯一人冷靜として立つてゐた。見れば彼の手にしてゐる畫狀の中には、狂氣した獸のやうに、世にも醜い表情をした僧侶の顔だの、興奮した人々の情熱に歪んだ奇怪な相貌などが、皮肉で辛辣なカリカチュールで描かれて居た。おお、レオナルド・ダ・キンチ！ けに彼こそは、その群集の中に於ての唯一人の醒めたる人であつた。當時、伊太利中世紀末の人心を支配してゐた二つの大きな時流的感情——カトリック教の妄想的神秘思想と、練金術の夢遊病的な神秘思想——はダキキンチにまで甚だ笑止なる心像にすぎなかつた。彼の見るところによれば、前者は愚劣な迷信であつて後者は通俗の詐欺にすぎなかつた。そして兩者共に無自覺な俗衆を狂熱させ、卑俗な時流的陶酔をあたへる低級センチメンタリズムにすぎなかつた。さればダキキンチが一人狂熱せる群集の座を離れて、冷やかに會堂の柱にもたれて居たと

*Handwritten signature and notes at the bottom of the page.*

き、彼の心はどんなに群集への苦々しい憎悪を感じたであらう。私は明らかにレオナルドの表情を讀むことができる。それは輕蔑と退意との搖動する、世にも寂しい孤獨者の顔ではなかつたか。彼自身の偉大な藝術、あの「モナ・リザ」の顔に見る神秘的な寂しい微笑——それは人間の靈魂の底知れない孤獨の悲哀を語つてゐる——ではなかつたか。

51

## 婦人と雨

しとしとと降る雨の中を、かすかに匂つてゐる菜種のやうで、けにやさしくも濃やかな情緒がそこにある。ああ婦人！ 婦人の側らに座つてゐるとき、私の思惟は濕ほひにぬれ、胸はなまめかしい香水の匂ひにひたる。けに婦人は生活の窓

にふる雨のやうなものだ。そこに窓の硝子を距てて雨景をみる。けぶれる柳の情緒ある世界をみる。ああ婦人は窓にふる雨の點々、しめやかな音楽のめろぢいのやうなものだ。我らをしていつも婦人に聴き惚らしめよ。かれらの實體に近よることなく、これらの床しき匂ひとめろぢいに就いてのみ、いつも密のやうな情熱の思慕をよさしめよ。ああこの濕をひのある雨氣の中で、婦人らの濃やかな吐息をかんず。婦人は雨のやうなものだ。

52

## 數學

數學は最高の美である。

*Luigi Wittgenstein*

53

## 文獻學者風な生活

微の生えた、または新しい、それら多くの書物や文獻に興味をもつ所の人々は、そして彼自身には、別に之れといふほどのはつきりした思想をもつて居ない所の人々は、通例一つの典雅な趣味によつて生活して居る。その典雅な趣味といふのは、かれの博識を見得にしやうといふ俗悪な感情からではなく、むしろその感情の家根の上に一片の「雅趣ある月影」——そこでは之れほどの思想が語られ、之れほどの感情が流れて行つた。そこではまた之れほどの書物がつくられ、之れほどの運動が新しく起された。といふ風な記録に關する追憶と、それら該博な智識の倉庫の前に彼の生徒らを立たせて、新奇なまた古色ある、色々様々な情調を味はせ且つ

驚異させ、ひそかに自身は文獻學の安樂椅子にもたれつつ、香氣の高い葉巻煙草でもくゆらして居やうといふ、さういつた風の納まり返つた、どこか閑散で尊大ぶつた感じのする「雅趣ある月影」——を眺めやうとするのである。

54

## シャルル・ボドレエル

阿片喫食者の夢にみる月光のやうに、いつも蒼ざめた病魔の影に夢遊して居たボドレエルのやうな人が、その反面の人格に於て、あんなにも明徹な、白日のやうな理性を隠してゐたといふことは、推察するだにも傷ましい近代的の悲哀である。なぜといつてその明徹な白晝の理性は、一方に於ての幽冥な月夜の幻想に對して、いつも慘憺たる否定と幻滅とを感じさせるからである。つまり言へ

ばボドレエルのやうな生活は、一つの人格に於て調和しない二重映像の交錯である。彼の一方の映像(叙情詩人としての映像)は、他の一方の映像(散文詩人としての映像)のために、いつも皮肉な諷刺と嘲笑を受け、その自由な靈魂の高く宇宙に飛翔しやうとする希望を抑壓されてゐる。しかもその理智的な映像は、到底また一つの最も切實な情緒「永遠への郷愁」を慰めることができない。だから彼の生活は、丁度あの不治の病にかかつた醫者のやうな者で、奇蹟のないことを知つて居ながら、しかも奇蹟を豫想することなしに生活できないのである。されば彼の自ら言ふ如く、藝術は彼にとつての眞理でもなく信仰でもない。そはただ不可思議な郷愁への慰安、生活の「悲しき慰安」にすぎないのだ。あだかも現代の人にとつて、宗教が眞理でもなく信仰でもなく、ただその不可思議な郷愁——すべての人間が、だれも心の底ではぼんやりと、しかし充分切實に感じてゐる靈魂の寂寥——への悲しい醫藥であると見られてゐるやうに。そして

また彼の生活の最大權威を藝術に見出すことのできない、あのうら悲しげな漂泊者「生活のための藝術家」にまで、すべての創作が慰めなき「悲しき玩具」であるにすぎないやうに。ここに近代的の、最も近代的の悲哀がある。傷ましき、傷ましき絶望の逃走がある。そして私のボドレエルに對する燃えるが如き愛がある。もしボドレエルが本質的な神秘幻想家であり、本質的な夢遊病者であり、また本質的な精神痴呆家であつたならば、即ちブレイクやエルレーヌのやうな、全然常識的の悟性を缺いた異常の人であつたならば、彼の詩に對する一般的の非難——その神秘的幻想の影にひそんでゐる、そのあまりに理智的、常識的の批判が、しばしば彼の詩の純一性を稀薄にするといふ非難——からは、たしかに避け得られたにちがひない。言ひ代へれば神秘詩人として、より純粹な成功を克ち得たかも知れない。けれどもその時のボドレエルは、もはや我々の時代が共鳴する人間詩人ボドレエルではないのだ。おおシャルル・ボドレ

エル！この「自ら信じない幻像の實在」に向つて、たえず靈魂の悲しい羽ばたきをした人こそ、我等の新しい言葉で言ふ意味での、眞の近代的神祕詩人でなければならぬ。

55

## 歪力のある人物

この奇妙なる人物は、彼のすべての無能にかかはらず、ただ一つの不思議な意志——歪力のある意志——によつて呼吸づけられる。見よ彼がそれを感じる時、どんな氣空の中にあつても、たちまち風景を變態させ、景色の裏側をひつぱがして見ることができるやうな、さういふ奇妙な慾情と決意とによつて燃えあがる。

56

## 婦人と演劇

婦人たちにとつて、どんな演劇も藝術で有り得ない。(彼等の一人もが例外なく、そんなに熱心な芝居好きであるに關はらず。)なぜといつて劇は——俳優の美しい顔は——彼等にまでいつも春風はるかぜのやうに感ぜられ、その色情の艶かしい快感を誘ふ原因であるから。つまり言つて婦人等は、劇を趣味の鑑賞と見ずして、性的實感の愉快な對象として享樂する。さればけに、それ故にこそ、ああ如何に劇場に於ての彼等が幸福に笑みこぼれて居るか。



**お家柄風の趣味** 一國の王様とか、何々の公爵閣下とも有らう者が、ちよこちよこ  
と走つて買物に出かけたり、町人共を相手に算盤を弾かれたり、ご自分で居間の掃除  
をなされたりするといふことは、あれらのお家柄風の趣味をもつた老臣共にまで、こ  
の上もなく苦々しい者に感じられる。なぜといつてそれらのつまらぬ雑用は、すべて  
奴隷のなすべき仕事であつて、本質的に卑しいこと、恥づべきことであるから。もち  
ろん我等の神聖な殿様には、奴隷らしいどんな風情もあつてはならない。その上また奴  
隷らを相手とする下賤な町人共にさへ、少しでも似寄つた所があつてはならない。否、  
我等自身の如き臣下輩にさへ、全然人種上的一致があつてはならない、我等は卑しき

凡俗の人間であるのに、かのおん方こそは比類なき高貴の生れであつて、やんごとな  
さの限りであるから。そこで恐懼に耐えない老臣共は、結局遂に主君をして、彼れ御自  
身の當然の仕事——主君として正に取らねばならない筈の實務——からも遠ざけてし  
まふであらう。彼等のお家柄風の趣味からみて、尙且つその實務があまりに人間臭く、  
したがつてまた町人臭く、奴隷臭く、所詮は「神聖らしくない」といふことの嫌悪から。  
されば最も「神聖らしいもの」は、彼の一室に於て終日端然と座つてゐることの外、何  
一つの仕事をすることもできないであらう。そして彼の則の椅子では、あの恐懼にた  
えない恭敬な老臣共が、内心密かに奴隷らしい忠實の誇りを感じながら、しかも實際  
に於ては、正に主君としての實務を潜越に處理して居るのである。彼等のお家柄風の  
趣味の、この上もない大満足の状態に於て。

58

## 國柄風の權力感情

權力感情の現はれに就いては、あれらの稀有な獨逸魂に於てよりも、もつと我等の手近い所に、もつと有り觸れた一般的の範疇を見ることができらる。彼自身にまで自ら高貴な權力の尊大を感ずると共に、彼以上の絶大な權力に對し、その重苦しき上からの威壓に對し、丁度あの撃たれた鐵盤の跳ねかへるやうに、よつて以て反對に自身を高翔させるところの、あの權力感情そのものの代表的範疇に就いて。——我が國の尊大な官吏を指すのである。

59

## 流行を追ふ人々へ

現に流行しつゝある衣裝を着て、彼女自ら流行の魁だと思ひちがへて居る所の、いかに小賢しき多くの婦人らがそこに居ることよ。

60

## 眞理は風景の中にある

廣い野原に於ては、どの馬もどの馬も甚だ似通つたもの、むしろ實際に同じ者であるやうに思はれると言つたソクラテス。眞理と概念の普遍性を立證したソクラテスに對して、一つの馬も私にまで決して同じでないと斷言したブ

ロタゴラスの徒は、伯樂ばくらくとしての甚だ優れた智慧を語つて居る。けに我等の——我等藝術家としての——觀照によれば、自然の中に於ける一切の存在は、それ自身の明白な個性を示して居る。そこには一つも同一な者がなく、したがつてまた概念がなく、したがつてまた真理の普遍性が證明され得ない。されば我等は、我等の趣味を個別的な者と信する限りに於て、ソクラテスにまで當然の反對を提出しなければならぬだらう。けれども若し我等にして、一度その日の風景と、その日の時刻とを考へるならば、ここに全くある別趣な情調が、意外に我等の氣分を一變するやも計りがたい。なぜといつて、あんなにも季候の險惡な、雲行きの望ましくない空の下で、そして良心の全く頽廢した詭辨論者共の、その似而非伯樂共ののさばり返つて横行してゐる野原の中では、それらの「勝手な個別名を附された馬の群」が、實際ソクラテスにまで同一な者に見えたかも知れぬ。丁度そのうじや、うじやしてゐる似而非伯樂——彼等自

身の個性を持たない、時流に媚びて盲動して居る者共——と同じく、一端ひとからけにしてからの「群俗」と見えたかも知れない。すくなくともさういふ天候の下に於ては。そしてあの異常な良心と叡智とを持った哲人、汝自らを知れと教へた哲人の觀察にして、誤謬のあり得べからざる由所を信する以上には。されば我等をして、まづその日の風景を眺望せしめよ。よつて以て彼等の真理の情調を彩どるところの、それらの種々なる風景に就いて觀望せしめよ。

61

どこに自然があるか

自然はそれ自ら醜惡である、そこには何の善い者も、何の美しい者も有りはしない。すべての善美は、ただ人工的なるもの、人間的なるもの

の中にだけあるといふ人文主義者と、自然はそれ自ら美にして且つ善である、すべての醜悪は人間的な人工によつてのみ作られるといふ自然主義者とは、見かけに於てよりも、実際にはよほど接近してゐるかも知れぬ。なぜといつて自然それ自らを完美と見る所の人々は、彼自身の心の意匠に於て、すでにそれを統一し美化してゐるのだから。言ひ代へれば、その「有るがままの自然」をば、彼自身の趣味性に於て加工し、そこに既に人工的な庭園——即ち藝術そのもの——を眺めてゐるのだから。そこでこの事實は、人間の個性的な主観を離れて、いかなる「有りのままの自然」もあり得ないといふ、簡單明白な眞理を言ひ代へたにすぎない。

## 酒場の隅から

酒場に於ての、あの騒々しい混雑や、怒號や、叫喚や、暴動や、さては涙つばい歌聲やに充ちた、あの騒々しい酒場に於ての、隅の暗く寂しけなる一つの顔を警戒せよ。光景が、彼にまで何を語るか。いかに腹立しけな、苦々しき、憎悪にみちた瞳孔がそこに眺めて居るか。ここに酔ふことできない——衆愚と共に酔ふことのできない——孤獨の慰めなき悲哀がある。そして彼所に酔ふことのできる——否既に快よく酔つばらつて居る——あれら群集の輝やかしい幸福がある。さればこの賑やかな酒場における、一つの薄暗い隅を警戒せよ。その椅子に於ての「憎悪に燃える瞳」を警戒せよ。それは明らかに「彼等」の幸福を嫉妬してゐる。それは復讐に熱して叫んで居る。——おお汝等、安價なる感傷家！

## 乾からびた菌

彼の生活の中での最も興味ある部分、即ち最も情熱の高い、最も浪漫的な部分を書き盡してしまつたあとでの藝術家は、もはや詩人としての感興を失つてしまふ。そこで彼は彼の老衰した——自分ではさう思つて居ない。自分では一層藝術的に洗練されたと思つてゐる——ところの調子の弱い趣味からして、くだらぬ日常茶飯事の中に、ちよつとした感興の「種」を見つけ出す。そして彼の熟練したアカデミカルの技巧にまで、それをば所謂「洗練された藝術」に仕立てあける。だからこの種の藝術は、一般に文壇の老衰期に於て、じめじめとした濕地の地盤に繁茂する。それは天氣の悪い日影で、下等な分裂繁殖をする菌類のやうなものだ。そこには何の輝やかしい太陽もない。何の高翔的な情熱もない。有るものはただ機智と技巧だけだ。すべての老人が悦ぶところの、あの「乾からびた菌」のやうな趣味だけだ。

## 餘色としての友人

人と人との友情は、愛は、いつも私自身の趣味や私自身の氣質やを、彼の性格の中に發見することによつてのみ結ばれる。つまり言へば友情とは「彼の中に認識されたる自我の存在」に外ならない。されば私の友人は、常に私と性格の合つた者、私と氣質のよく一致する者に限られるだらう。しかもそこには、何かの一般的な例外がありはしないか。いかにしばしば人々は、彼の性格の正反對におけるかの如き人物を親友とすることぞ。しかもこの場合に於てすら、尙且つそれは彼の性格の一部を代表するもの、むしろ却つて性格の餘色における著しい顯現を語るものではないか。なぜといつて我々の心の影には、公衆の目前から秘密にされたる——た

だ私自身だけが知つてゐる——ところのあまりに多くの自我があるから。諸君は諸君自らそれを知つて居る。あの世間から「おとなしい人物」と言はれる人が、内密に於ていかにおだやかならぬ非望や邪淫への好尚を抱いて居るか。公衆はただ、我々の性格の外観的な見かけを知るにすぎない。我々自身の眞の性格——そこには未だ一度も外面の行爲に現れないやうな、あまりに多くの熱望や傾向やがひそんで居る——は、全世界に於て唯私一人だけがそれを知つて居る。されば所謂「性格に反した友人」とは、世間が我々を見る眼に於て、我々の見かけに於ける人物から判定した上に於ての矛盾である。我々自身の側から言へば、どんな「性格に反した友人」も有りはしない。畢竟彼に見るところの者は、我々自身の生活に於て、常に熱心な内密の願望をもちながら、ある何かの事情のために——恐らくは内氣か、不決斷か、非力か、無能かのため——自ら行爲として實現することのできない、したがつてそれだけまた爆發性の

強い、ある潜熱的な自我に外ならない。されば人々は、彼の「見かけの上での人物」と反對した所の、それらの「餘色としての友人」に對して、他のすべての友人以上にも、遙かに遙かに熱の高い愛を寄せて居る。けにそれは一種の英雄崇拜の感情でさへもある。みよかの羊のやうに温厚な人と、狼のやうに野蠻な人とは、相互の熱愛と畏敬とによつて、友誼のいかに完全な顯現を見せて居ることか。けだし彼等の友情は、互に自己の熱望する、しかも自己の實現し得ない行爲——それが即ち理想である——を各自の對手によつて現實されることにより、そこに絶大の英雄的崇敬と異常なる自我の満足とを感じ合ふのである。そして、さらば此所に見よ。あれらの文壇に於ける内氣で善良な人物——然り、見かけの上では——が、彼等の空想上の友人としてすら、いかにしばしば兇惡不逞の人物を表現し、且つそれを熱愛し嘆美するか。

65

## 芝生の上で

若草の芽が萌えるやうに、この日當りのよい芝生の上では、思想が後から後からと成長してくる。けれどもそれらの思想は、私にまで何の交渉があらうぞ。私はただ青空を眺めて居たい。あの蒼天の夢の中に溶けてしまふやうな、さういふ思想の幻想だけを育ぐみたいのだ。私自身の情緒の影で、なつかしい緑蔭の夢をつくるやうな、それらの「情調ある思想」だけを語りたいたのだ。空飛ぶ小鳥よ。

66

## 朦朧の明哲

あの美しい月夜の情景は、そしてこの輝やかしい今日の思想は、さばかりそれが私にまで切實に、明白に、強烈に感じられる故に、けにそれ故に説明の言葉を失つてしまふ。——ああ「感動は言葉を失ふ」——だから我等の觀念や思想やは、それが「感じ」として鮮明強烈であればあるほど、「説明」として曖昧朦朧な象徴となつてしまふ。よつて知るべし曖昧と朦朧とは、最も直接明晰な表現であることを。

67

## 粹な風俗と野暮の風俗

「粹」といふ氣分は、機智のきびきびと働らいてゐる、隅から隅まで手入れの行き届いてゐる、一括して言へば氣の利いて垢ぬけのしてゐる。それらの瀟洒な風俗が、一般に感じさせる輕快の氣分である。さればこの感じの反映

には、いつもあの鈍重で氣の利かない、田舎じみてぼたぼたした、要するに垢ぬけのしない「野慕」が対象される。けれどもそこには、尙多くの野慕を悦ぶ人々があるだらう。なぜといつて粹は——粹の風俗は——それ自ら輕佻浮薄な町人趣味ではないか。そのきびきびとして抜目のない感覺は、それ自らの小利口さに於て、彼等の浮はつ調子な、こせこせとした、餘裕のない生活を感じさせるではないか。野慕を悦ぶ人々は、何よりもさういつた粹の輕薄さ、安つぼさ、小利口さを厭ふのである。彼等は粹を好まない。彼等はもつと重厚な、奥床しい、むしろより鈍重な、何かのある勿體ぶつた重々しい感じを好んでゐる。それ故にあの昔の大名や武士たち——勿體ぶつた重々しさに於ける、すべての重厚な威權を悦ぶ人たち——にとつて、あれらの素町人共のいなせ肌の風俗は、見さけ果てたる野卑の惡趣味としか感じられないであらう。そして一方の町人共にまで、それらの大名風の重苦しい、どことなくぼたぼたして垢ぬけの

しない野慕天の風俗がたまらない輕蔑の氣分を感じさせるであらう。けに粹を尊ぶ人々は、あまつさへ野慕に對する挑戰的態度をすら隠してゐる。彼等が粹を悦ぶ心の内には、その反面に於ける彼等の敵——大名や、武士や、資本家や、華族や、官吏や、特に智識階級の人々や——が一般に持つてゐる、あの重苦しい勿體ぶつた貴族風の感情に對する、ざつくばらんの平民根性をぶちまけた叛逆的の痛快さを叫んでゐる。きけ彼等の趣味が、彼等の感情にまでかう言つてゐる。「見ろ。ここに我等民衆の生活があるのだ。手前つち、やい氣位ばかり高い、そのくせいも薄寢ぼけてゐる智識階級の奴共！ 手前等の氣の利かない鈍重の頭で、これらの生きてびちびちしてゐる、絶えず活社會に躍動し流動してゐる、この鮮新な己等の感情がわかるか。このきびきびとした「粹」の味がわかるか。」然り、それが即ち粹の趣味を悦ぶところの粹の感情である。されば我等にまで粹と感じられるところの一切の風俗は、それ自ら民衆的の感



情と民衆的の生活とを表象してゐるであらう。見よかの工場に於ける職工の淺黄服が、近代的の趣味に於ての如何に氣の利いた粹の感じをあたへるか。またかの雪白の帽子を横に被つた料理人の風俗や、西洋下女の忙がしさうなエブロン姿や、職人共の仕事着をきた元氣の好い様子や、新聞賣子の意勢の好い姿や、牛乳配達の若々しく活潑ないでたちや、魚河岸商人のいなせ肌や、煙突掃除人の煤によごれた、しかもどこか潑漣たる氣分にみちた特種の風俗やは、すべて我等にまでたまらなく「粹なもの」といふ美感をあたへる。それらの風俗における趣味は、すべてこの活潑に流動してゐる實社會の背景とその感情とを象徴してゐる。そこではあらゆる感覺や智慧やが、痛快にまで元氣よくきびきびと働らき、活社會そのものから躍動するところの拔目のない鮮新の氣分が溢れてゐる。されば此等の風俗に比するとき、あの重々しい紳士風の風采、山高帽にフロックコートといった類の重厚な風采が、どんなに間が抜けて野暮くさく、

すべてに於て「氣の利かないもの」——感覺や機智の活潑な働らきを缺いた鈍重さ——を思はせるであらう。しかもその氣の利かない鈍重さこそは、反對の趣味から見てこの上もなく尊重されるもの、よつて以てそこに人格の奥床しさや、智識の深遠さや、いやしくも輕佻浮薄の徒に非ざる人物の堂々たる威權を表示するもの、けに貴族らしき、官吏らしき、智識階級らしき、その誇りに於ける一切の勿體ぶつた重々しさを表現するところの美でなければならぬ。

あまりに獨逸的な感情　あれらの音樂會に於ける、あれらの多數の聴衆は、實際に何を聴いて居るのであらうか。すくなくともその樂式の大要を知り、その轉調の變

化を聞きわけ、和聲の主和弦を捉へ、替手の動機を知覺し、リズムやテンポの章節に於ける展開に關して、あらかじめ相當の豫備智識をもつことなくして、到底その趣味を理解することのできないであらう筈の、あれらの非常に理智的で高尚な近代的形式音楽——ベトーベンのソタナや、モツアルトのシムホニイや、ハイドンの司伴樂や、パツハの追覆樂や、——に對して、殆んど全く音樂的素養の絶無ともいふべき多數の日本人が、そんなにも熱心に喝采し、そんなにも熱心に耳を傾けて居る有様は、私にまでいつもある皮肉な諷刺を感じさせる。思ふに彼等の大部分は、そのあまりに高尚すぎる音樂に對して、何の眞實の陶醉をも感じては居ないのだらう。結局彼等の正直さから言つて、それは譯のわからない、ただむやみにむづかしさうに見えるだけのものにすぎないのであらう。されば彼等の熱心はどこにあるか。彼等がその「長い倦々した退屈」の後に於て、あんなにも熱心に——幾分は彌次馬的にさへ——喝采する心

理はどこから來るか。事實を言へば、あれら多數の聴衆が求めて居るのは、さういつた藝術的の享樂ではなくして、ある他の全く別なもの、それほどにも有名な、世界の最も偉大な藝術、人類の輝やかしい名譽、感情の驚嘆すべき光輝の前に、恭しくも恐る恐る拜調することより、彼等自身の生活にまで何かの勿體ぶつた重々しい威壓——藝術の神聖さとか、精神の光輝ある勝利とか言つたやうな——を感得し、よつて以て彼等自身の氣位の高い貴族的な感情を満足しやうといふ次第なのである。されば彼等は、實際に於てよりむづかしいもの、より譯のわからないものを悦び、彼等の藝術的無理解からくる退屈さの正比例に於て、より盛んに熱心に喝采するであらう。そして實際彼等の趣味にまで了解されるところの、したがつて充分の藝術的幸福を味ひ得るところの、それらの通俗で低級な市井の音樂に對しては、故意に顔をそむけて内密の感興をさへ叫りつけやうと試みるであらう。けにそこにはあの權力感情が、彼自らを

尊大に感ずると共に、更に一層偉大な權威によつて壓迫されることにより、重たい楯によつて撃たれた鐵敷の如く、反對に自我を上方に高翔させやうとする權力感情が、そのあまりに獨逸的な、あまりに貴族主義的な範疇がありはしないか。いかに我が國の新しき時代の青年の間にすら。

69

## 觸手ある思想

海洋の底での眞珠が仄白く光つて居るやうに、それらの不得要領な思想の浪間にさへ、尙且つ何等かの鮮新な暗示を感じさせるやうな論文は、この海景の一角に於ての、岩のやうな威風を示すところの、けれども新しい何の暗示をもあたへないところの、あれらの條理正然引證該博なる大論文に比して、遙かに遙かにすぐ

れた價值を持つて居るだらう。なぜといつて支離滅烈なるひとでの觸手は、薄明の浪間に於てさへ、尙且つ生物のやうに遊動して、我等泳ぐ人の心に多少の刺戟をあたへるのに、かしこの嚴然たる岬は、我等にまで退屈の眺望の外、何の望ましい感興もあたへないではないか。

70

## 天界旅行への幻想と錯覺

我等のごとく、その景色の圏外に立つ人の見るところによれば、あれらの圏内に住む哲學者たちは、一つの普遍的な妄想に捉はれて居る如く思はれる。そもそも彼等が昔から天の一方に幻想する、あの不可思議なる「實在」とは何であるか。そもそもまた彼等の天界旅行にまで、どんな形様の風船が選ばれた

か。我等の視るところによれば、彼等の風船はあまりに頑重でごちたなく、とても目的に適はしく思はれない。みよその機體の材量は、いつも抽象と概念との一式張りではないか。それが一面に綜合されればされるほど、いよいよ以て一面には分析され、いよいよ以て具象的な實體と没交渉になるところの、あのぎこちない概念と抽象ではないか。されば彼等のいふ「一切原理の統一」とは、その實一切原理の最大な外延をもつた一概念の空想にすぎない。即ち世界に於ての最も抽象的な觀念、それ自ら實有性のない空虚なもの、けに絶対具象の眞如とは似ても似つかぬものではなからうか。

とはいへ實際には、彼等と雖もさまで明白な妄想に誤まれて居ないのである。なぜといつて彼等の中での一人すらが、かつて實際にそんな不細工な材量で、そんなブリキ製の風船で、彼等の冒險的な天界旅行にまで出發した記録があるか。古來彼等の旅行記に就いて、彼等の自ら見て來た天界の景色に就いて、今我等にまで知られてゐ

*Die Hauptstadt des Landes  
des Gurgk*

る多くの事實は、すべて何事の眞理を語つて居るか。たとへばプラトーンのイデヤ、スピノーザの神、フイーテの自我、シヨールペンハウエルの意志に就いて。けに此等の「絶対」に就いて、彼等のどんな理屈をも充分に説明されて居ないのだ。みよイデヤに就いて、我等のプラトーンは何を言はうとしたか。人の信する如く、しかくイデヤは「説明されたるもの」であり得るか。それが正に概念の概念を抽象したものであり、非人格の非人格を觀念づけたる一命題であるといふことによつて、それだけの平面的な演繹によつて、果してプラトーンが満足し得るかどうか。もしそれだけの「理屈」であるならば、彼のイデヤが漂渺するあの夢の濃い叙情詩的な感情——「生命の永遠に對する郷愁」であり「靈魂の愛に目ざめる羽ばたき」でもあるほど、それほどにも情趣の深いイデヤの香氣——を、そもそもどこに感覺することができやうぞ。さればイデヤの實有性は、プラトーンの意識にまで明らかに單純な概念——によつて以て論理

的に説明され得るところの概念——ではない。それは人格や趣味から抽象された空理上の觀念でなくして、むしろ彼自身の感情の内に體顯されたところの、一種の直感的なVISIONではなかつたか。更らにまた之れをスピノーザに就いて思ふ。あの「神に酔つた人」と言はれたスピノーザに就いて、そして眞理はただ神によつてのみ體顯されるもの、神の愛を切に體驗することによつてのみ眞理に到達し得ると信じてゐたスピノーザに就いて、そもそも何の概念や理屈が要求されやうぞ。すべての哲學者は彼の眞理の絶對性に就いて、彼の現に自ら見てきた天界の秘事に關しては、一篇の象徴詩以外のどんな明白な説明をも、また況んや哲學をも語つて居ないのである。なぜといつてその天景こそは、實に彼自身の感情と人格の雲に浮んでゐる、ある説明すべからざる絶對具象の者——眞如そのもの——に外ならないから。

されば彼等の旅行の始に於ても、また終に於ても、結局その荷やつかないブリキ製

の風船は、何の「實際の用」にも立たなかつたのではないか。むしろ眞實はかうではないか。彼等哲學者——この景色の圈内に住んでゐる市民たち——が、あんなにもまめまめしく立働らいて、彼等の工場内に於ける抽象の風船を建造しつつあるのは、よつて以て彼等の幻影である天界への虹を捉へるため、その天界への旅行を企てるための目的からでなく、事實は全く反對の落下性を帯びて居るのではないか。つまり言へばこの景色は、彼等の現に住んでゐる市街は、ある一種の神祕的な磁力によつて、それ自ら空中に引きあげられ、また自ら空中に浮遊しつつあるのではないか、そして彼等が現に造つてゐる——造りつつある——あまたのブリキ製の風船は、その概念の重みによつて自然地下にまで沈下するやうにできて居るもの、つまりそれによつて彼等眞理を捉へた——眞理そのものの雲の中に浮んでゐる——「空中の人」の意志をば、遙かに下界の地上の人々にまで傳達するための目的に使用されて居るのではないか。

しかも「空中の人」自身の側では、自らその製作する機械の運命を知らず、却つてそれによつて彼自らを天界へ上昇させ得るものと信じてゐるではないか。この一つの眺めに於て、すべての哲學者は不思議の錯覺に陥入つて居る。

## 71

## 舌のない眞理

とある幻燈の中で、青白い雪の降りつもつてゐる、しづかなしづかな景色の中で、私は一つの眞理をつかんだ。物言ふことのできない、永遠に永遠にうら悲しげな、私は「舌のない眞理」を感じた。景色の、幻燈の、雪のつもる影を過ぎさつて行く、さびしい青猫の像をかんじた。

## 72

## 理性の病氣

「眞面目すぎる」と言はれる人は、通例何かの病的な缺陷をもつてゐる。その肉體にか。その心にか。恐らくは多分その理性にか。

## 73

## 慈悲

風琴の鎮魂樂をさくやうに、冥想の厚い壁の影で、靜かに湧きあがつてくる黒い感情、情慾の強い悩みを抑へ、果敢ない運命への叛逆や、何といふこともない生活の暗愁や、いらいらした心の焦燥やを忘れさせ、安らかな安らかな寢臺の上で、

靈魂の深みある眠りをさそふやうな、一つの力ある静かな感情。それは生活の疲れた薄暮に、鳴響の鈍いなりをたてる、大きな巾のある静かな感情。——佛陀の教へた慈悲の哲學！

## 74

浪と無明　　無明は浪のやうなものだ。生活の物寂しい海の面で、寄せてはくだけくだけてはまたうち寄せ来る。あまた引き去り高まり来る情慾の浪、意志の浪、邪念の浪、何といふこともない暗愁の浪、浪、浪、浪、浪。けにこの寂しい眺望こそは、曇天の暗い海の面で、いつも憂鬱に單調な響を繰りかへす。されば此所の海邊を過ぎて、かの遠く行く砂丘の足跡を踏み行かうよ。佛陀の寂しい時計に映る、自然の、

海洋の、永遠の時間を思惟しやうよ。いま暮色ある海の面に、寄せてはくだけ、くだけてはまた寄せ来る、無明のほの白い浪を眺める。しぜん悲しく、憂ひにくづるる濱邊の心ら。

## 75

## 豫感としての幸福

夜の淺草公園を歩いてゐる人々は、たれも何かの「華やかな夢」を心に感じてゐる。あの眩惑する裝飾電燈、賑やかで騒々しい音楽、流れてゐる群集の浪とその感情、肉情の強い希望をそそのかす華美の色彩、すべて此等の漂渺する情調は、人々の心にまで遠く近く夢の濃い「歡樂への豫感」を感じさせるであらう。そしてこの豫感は、あの燈火の周圍に群がる蛾のやうに我等を焦燥させ、そんな

にも望ましい歡樂の眞心まごころへ我等自身を溶け込まさふとあせらせる。けれどもどこに果して、そんな望ましい實際の歡樂があるのだらう。もしも我等が何かのはかない希望にそそられて、それらの明るい窓の一つ、娛樂場の一つへ飛び込むならば、いつもそこでは退屈な活動寫眞や、面白くもない有り來りの演藝が繰り返されてるにすぎない。けにそこには何のめざましい歡樂の影すら有りはしない。何の豫感されたる甘美の快樂もありはしない。ああそこで一切は幻滅である。されば我等が淺草での幸福は、それらの娛樂場や、燈火や、飲食店や、音楽や、色彩や、群集やの個々の者になくして、それらのすべてがつくる一つの夢景的な情調にある。その情調が呼び起すところの「歡樂の豫感」にだけある。ここに都會巡禮者は歌つて言ふ。「群集の浪にもまれて、私は永遠に都會を歩いて居よう。都會の夜の夢にこがれて、見知らぬ幸福の幻影を空に眺めて。」けに人生に於ては、どこにも實際の幸福、個々の實現する幸福は有り

得ない。眞に我等の知覺し得るものは、いつもただ漠然として感じ得られる幸福の情調、及びその情調が呼び起すところの幸福の豫感だけである。永遠に、永遠に實現されることのない、歡樂の周圍に於てのはかない羽ばたきだけである。

目的は結論にない 藝術に於ける表現上の技巧——修辭や、口調や、比喩や、韻

律や、色彩や、筆致やの苦心——を無用視する人々は、かれの思想の結論だけを述べ、さつさと演壇を降りやうとする辯士のやうなものだ。それで若し聽衆に意志が通じたとしたら？ せいぜいのところ聽衆は、彼の屬してゐる黨派を知るばかりであらう。彼自身の人物とは更に關係なく。



77

秋晴 牧場の牛が草を食つてゐるのをみて、閑散や怠惰の趣味を解しないほど、それほど近代的になつてしまつた人々にまで、私はいかなる會話をもさけるであらう。私の肌にしみ込んでくる、この秋日和の物倦い眠たさに就いて、この古風なる私の思操の情調に就いて、この上もはや語らないであらう。

78

月を眺めて

全世界の俗物どもを對手として、かれの高貴なる感情のために闘つ

た獨逸人。雄々しくもけなげなる獨逸人。君らの信念に對する純潔さと、その男らしくも敢爲なる精神とは、遠き永遠の未來にまで、ながく地上の潔白さを照すであらう。——ああ今宵の悲壯にして蒼白なる情景かな。

79

非文明への感情

「人生の目的は幸福である」といふ類の考は、それ自らの響の中に、文化に對する苦々しい憎惡の感情を語つてゐる。なぜといつて一切の文明は、必然的に幸福の豫想を裏切るから。見よどこに幸福の人々が居るか、なぜ我等の成人は不幸であり、なぜ我等の無邪氣な子供のみが、いつも愉快に幸福に嬉戯してゐるか。なぜあの智識あり教養ある人々が陰鬱であり、なぜあの無智無學の農夫だけがいつも

樂天的で有り得るか。およそ眞に幸福な人々は、今日の複雑な社會に住んでゐる文明人でなくして、太古の樂園に簡易生活をしてゐた野蠻人ではなかつたか。そしてあの生れつきの白痴が、この世に於ての最も幸福な人間であることを推考せよ。畢竟するに幸福は、我等の生活に於ける質素さや、簡易や、無邪氣さや、無識さや、原始さやと平行する。されば人生を複雑にするところの文明は、それ自ら幸福の破壊者といふべきである。一つの新しい機械の發明は、たしかに一つの「便利」をつくるであらう。そして一つの新しい智識は、たしかに一つの「欲望」を増加するであらう。けれどもそれは——それ故にこそ——却つて人生を煩はしく不幸にする。結局文明によつては、どんな幸福も確實にされはしないのである。だからすべての幸福論者——すべての幸福論者は、幸福の「價值」に就いて欲求しない。彼等は偏へに「幸福そのもの」を考へる。——は、必然的に文明を呪詛してその逆景を憧憬するであらう。然り、我等は

そこに二種の幸福論者を見る。利己的幸福論者と、そして他愛的幸福論者（一名功利主義者）と。そこで前者が主張するものは、即ち所謂自然主義——文化主義の正面の呪詛者である自然主義——ではないか。そして後者が絶叫するものは、あの「最大多數の人々の最大多數の幸福」を倫理學のモットオとする一切の功利主義——マルクスの唯物社會主義、トルストイ的人道社會主義、何れにせよ自然主義の兄弟分であるこれらの功利主義。——ではないか。されば「人生の目的は幸福にある」といふ思想は、それが利己的であるにせよ、他愛的であるにせよ、その言葉自身の中に、文化に對する挑戰の砲聲殷々たるを感じさせる。

### 藝術家の娯樂はどこにあるか

我々藝術家は、いかなる藝術的の娯樂をも要求しないであらう。なぜといつて我等の専門的の高い趣味からみれば、どんな藝術的の娯樂も、所詮は通俗の見物を對手とする甘口のセンチメンタルにすぎないから。でないとしたところで、何らかそれが藝術的の鑑賞批判を呼び起す限り——すべての藝術的の娯樂は、それが藝術的である限りに於て、必然的にそれを呼び起すであらう。——もはや我等の對象は娯樂でなくなつてくる。言ひ代へれば、我等はそれを批評的に、反省的に、眞面目に、四角張つて眺めてくる。しかも我等がそこで要求してゐるものは、そんな肩の張るやうな理屈っぽい藝術ではなくして、あの罪のない無邪氣な娯樂、よつて以て生活の勞苦を忘れさせ、煩鎖な思索から我等を解放し、一切の理屈を忘れて罪もなく愉快にしてくれるところの娯樂——娯樂そのもの——ではないのか。あまつさへ晝間に於ての藝術的勞働に疲れてゐる我等は、この上さらに夜間に於ての藝術を

要求しないであらう。願くは我等に休息をあたへよ。我等をして我等の職業から暫時遠ざけしめよ。かくして一日の勞苦を慰むべく、我等は夜の娯樂場へ走るであらう。さらばけにどこに我等藝術家の娯樂があるか。我等の職業から我等を完全に忘れさせるところの、言ひ代へれば藝術的臭氣の少しもしないところの、それらの好ましい愉快な娯樂演藝はどこにあるか。我等はそれを求めてゐる。あの罪のない無邪氣な哄笑を、理屈も藝術もない馬鹿々々しい道化芝居を。そしてあの思ひ切つて奇抜な離れ業を、氣の利いた駄洒落を、輕口を、もしくはあの陽氣で浮れたつラグライムの音楽を、最新流行の風俗と小唄とを。尙且つその上にも眞紅に燃える華美の衣装と、若く美しい娘たちとを。そして最後に——それが最も重要なものとして——我等にまで艶かしい色情の幸福を充分に享樂させるであらうところの、あれらの半裸體の娘たちの肉情的な舞踏や、そのありとあらゆる姿態における曲藝やを。然り、然り、かくの如き演

藝こそ、我等藝術家の求めてゐる最善の娛樂である。そこに於てのみ、我等は始めて我等の職業から解放されるであらう。言ひ代れば、何等藝術的鑑賞の批判を意識することなく、一切の理屈を忘れて愉快に面白く一夜を享樂することができらうであらう。されば見よ、外國の知名の文學者らが、あの曲馬團の天幕小屋と、美人歌劇團の寄亭劇場に於てのみ、いかに彼等の内密な熱心を示して居るか。

## 81

◎主観と客観 「主観」「客観」といふ事は、普通には「自我」に對する「非我」を意味してゐる。即ち私は主観であり、私以外の物は皆客観である。けれども文壇でいふ主観、客観——たとへば主観的態度、客観的態度、主観描寫、客観描寫の類。——は

## 主

通俗のそれと少しく語意を異にしてゐるであらう。なぜといつて私は私自身を客観的に描寫することができる。私は「私」の一人稱によつて、私自身の生活を極めて冷靜な觀照的批判に訴へることができる。そしてかうした態度は、普通に文壇で客観的態度と呼ばれてゐるのである。之れに反してまたある種の藝術は、主として自然界の事物——他人の數奇な運命や、社會的の悲劇や、天然の夢幻的な美や——を叙したものであるにかかはらず、實際にはしばしば主観的態度の藝術と呼ばれてゐる。されば我々の言葉でいふ「主観」「客観」とは何を意味するのであらうか。私が私自身を客観的に描寫するといふことは、私が私以外の立場——第三者の立場——に立つて私自身を眺めることを言ふのであらうか。ああそんな奇々妙々な手品がどうしてできやう、我々にして魔法の分身術でも行はない限りは。

然るにまたここに一つの不思議がある。かの客観主義の文壇に於て、我々はしばし

ば次の如き説教を聴かされた。曰く「汝自身の主観を捨てよ」「汝自身の趣味を捨てよ」「常に客観的であれ、科學の如くあれ。」と。されば客観とは矢張「自我を離れる態度」といふ次第であらうか。即ち科學の如く抽象的没個性であれといふ意味であらうか。もしさうだとするならば、客観描寫の藝術とはいかに無意義なるかな。否むしろそれは藝術と言ひ得ることすらできないであらう。なぜといつて藝術の創作とは自我の人格を描出することの謂に外ならない。換言すれば藝術は即ち個性の高調である。主観の全躍である。そもそも私自身の主観を捨て、私自身を離れてしまつて、どこにまた私の藝術が存在し得るか。理論上に於ても、また實際上に於ても、我等はかくの如き没個性の藝術を想像することができない。ともあれ生きた事實の證據をみよ。どんな所謂客観描寫の藝術が、果して主観を捨てた態度、自我を離れた態度で描かれてゐるか。もしどこかにそんな表現があるとすれば、それはあの物理學教科書の挿畫に用ゐ

る機械標本圖式の類にすぎないだらう。然りそれは確かに主観を捨てて描いた純粹の實物寫眞畫である。そこには作家の個性が絶対に現はれてゐない。即ち純粹の客観描寫である。けれどもいやしくも藝術と言はれてゐる以上の作品には、決してそんな純粹の客観的描寫が有り得ない。すべての藝術品は——それが客観的であると主観的であるとを問はず——そこに必ず明白なる作家の個性が現はれてゐる。そしてけに、それがあるがためにのみ藝術品の藝術品たる意義が存在するのだ。されば文壇でいふ客観的の語意が、むしろ「自我を主張する」であつても「自我を離れる」の意義でないことは明らかである。否、自體それ自身が主我の表現である藝術の世界に於て、かやうなことを論ずるだけが没常識である。

さてそれならば文壇でいふ主観客観は何を意味するか。本來主我的な表現の中で、更にまた念入りに主観的な態度をとるといふのはどういふ次第か。況んやまたその反

對の客觀的態度とは何の謂であるか。暫らく理論を避け、これを實例について觀察しやう。普通に我等が客觀描寫の藝術といふのは何を指すか。それは概して寫實的、現實的、觀照的な態度に於て描かれた藝術、一括していへば感情の我執を捨てて冷靜明徹な智慧の批判に於て觀照された自然主義系統の作品を指してゐる。之れに反して普通に主觀的と呼ばれる作品は、概して情熱的、空想的、道德的の傾向を生じた作品、即ち叡智的であるよりは、むしろ著るしく感情的に高調された浪漫主義系統の藝術を意義してゐる。さて然らばここで今一度「自我を客觀的に眺める」といふ言葉の眞意を考へよ。それが「自我を離れて自我を見る」といふ如き奇怪なる分身術的幻術を意味しないことは勿論であらう。そしてまたそれが心理學的の抽象分析を意味しないことも勿論であらう。なぜといつて藝術は直感の表現であり——直感である限りに於てそれは主觀的である——科學の如き抽象の理屈を事とするものでない。されば「自我を客觀

的に眺める」とは何の謂であるか。他なしこの場合の客觀的とは、冷靜なる叡智の觀照的態度——智慧の光によつて物如の真相を照らし出す——を意味してゐる。そしてこの意味は、「自然を客觀的に眺める」といふ場合に於ても同様である。但し勿論かうした言葉の反影には、それと反對の「自然を主觀的に見る」「自我を主觀的に見る」が相對されてゐることは言ふ迄もない。そしてこの場合の主觀的とは、それ自ら情熱的感激的態度を意味してゐる。けに文壇で言はれる主觀客觀の意義はそれである。即ち客觀的とは冷靜な觀照的批判に於ける態度、主觀的とは情熱によつて高調された浪漫的態度である。故に之れを約言すれば、客觀は「叡智的——理性的」を意味し、主觀は「情緒的——感情的」を意味してゐる。しかして之れは二つながら自我に屬するもの、即ち廣義の主觀に於ける要素に外ならぬ。

されば我等にして客觀的の態度をとる限り、我等の藝術は正しく科學的であるなら

う。即ち冷靜な理性の觀察によつてよく物心の真相を把握することができるであらう。けれども既に言ふ如く藝術は科學でない。我等の言葉でいふ理性とは、普通の常識がいふ理性と内容を別にする。普通の通俗語でいふ理性とは、分析や抽象の智慧を意味してゐる。それは正に科學や哲學の認識を司どる推理能力、即ち所謂「悟性」の謂である。然るに我々のいふ理性は之れとちがつて——否むしろその正反對であつて——綜合的、全局的に物如の眞を把握する直感上の洞察力「睿智」である。されば所謂「悟性」と「睿智」とを差別せよ。したがつてまた科學と藝術とを差別せよ。ここに兩者の全く相入れない矛盾がある。科學は事物を部分に分析し、藝術は之れを全局的に綜合する。前者は實體の屬性を抽象し、後者は實體それ自身を直感として會得する。然り藝術の智慧は直感である。體感上での認識である。それは理屈でなくして「感じ」である。即ち廣義の意味での「感情」である。尙言ひ代へれば、「人格それ自身」である。

だから藝術の表現は、いかにそれが睿智的であらうとも、所詮矢張自我の個性を離れることができない。否それが睿智的であればあるほど、そして所謂客觀的態度であればあるほど、いよいよ以て反對に純一個性を顯現するであらう。尙よく事實に就いての道理を説明しやう。

すべての客觀主義の藝術はいふ。我等は主觀の偏見を排し 偏へに對象をそひ有るがままの姿に於て如實に描出すると。けれども人間は寫眞機でない。我等は本來感情や個性をもつた動物である。さればどうして自然をその「有るがままの姿」に於て映寫することができやうぞ。自然が我等の網膜に投影するものは、常に我等自身にとつて興味ある印象、魅惑のある印象に限られる。自我にとつて感興のない退意な印象は、眼之れを寫せども心之れを寫さず、況んやどうしてそれを畫布や文筆に描出することができやう。我等のどんな客觀的な態度も、寫眞機械のレンズの忠實さを學ぶわけ

に行かない。我等の實際になし得る仕事は、この無限の景物と無限の情趣とに充ちた自然人生の大無盡蔵からして、單に我等自身の鑑賞的趣味——美に對する特種な好み——に適應した場面だけを選定し、更にまたその場面の中での自我の趣味に適つた部分だけを切り抜いて描出するにすぎないのだ。故に我等の「最も客觀的な態度」が描寫するものは、その實自然の中に反影された「最も主我的な個性」に外ならない。けに「自我以外」の外物を描いたどんな藝術もそこにありはしない。すべての客觀主義の藝術はそれ自ら主觀主義の藝術である。それが優秀な作品である限り、そこには必ず作家その人の個性が鮮明に押し出されてゐる。否それは所謂主觀主義の藝術に比し、却つて一層高調された純一な個性を表現してゐる。なぜならばそれは不純の概念を混ざることなく、全く純一の直感的趣味だけで描かれてゐるからである。

およそ一切の藝術の目的が、自我そのものの表現にあることは繰返して説くまでも

ないだらう。けに自我は宇宙一切である。自我の顯現は眞にして美、善にしてまた常に美である。然らば言ふ所の自我とは何物であるか。我等が一口に自我といふものの中には種々雑多な要素——思想とか、智識とか、經驗とか、地位とか、名譽とか、財産とか、肉體とか、——が含まれてゐるであらう。此等は皆自我の一部である。けれども意識されたる明白の自我は、それらすべての者の渾沌として融合されたこの生きた人格、この現に意識されてゐる單純な「感じ」にすぎない。けに宇宙に於て自我の内容ほど複雑無限なものはなく、自我の意識ほど單純明白なものはない、所詮自我の發展とは、この複雑無限なる宇宙を自我の中に統一し、よつて以て單純自明な「感じ」として把握するに外ならぬ。さればより自我の人格中に消化され、より完全に自我の血液となりきつてしまつた思想ほど、より單純自明な「感じ」として直感される。そしてより不消化な、より非我的な思想ほど、「感じ」としての單純自明さを失つてくる。



即ちこの類の者は、人格から引き出された抽象の理屈として考へられる。故に眞の人格的表現に於ては、意識上での複雑さを示す一切の思想——即ち一切の抽象的概念——を排斥せねばならぬ。そして最も單純自明な直感、それ自らが人格の呼吸であり感情であるところの慾情だけを表現せねばならない。しかしてその最も純粹なものは「趣味」である。趣味は全然理屈を含まない。即ち絶対に概念を混じてゐない。それは全く單純な好き嫌ひである。さればすべての思想や智識やは、それが單純な趣味となり得た時に於てのみ、始めて完全に人格の中に消化されたのである。いやしくも未だ趣味として意識されないほどの思想や經驗やは眞の「自我」に屬してゐない。かくの如きものは自我の世界に於ての客觀的存在である。概念である限りに於て人格から抽象さるべきものである。

然り、そして實に此所にかの客觀主義の主張がある。寫實主義の美學の原理がある。

みよ彼等の自然人生に對する藝術的態度を。彼等はいつもその眼に映するがままの世界を、眼に映するがままの印象で描いて居る。そこでは何等の概念的的人生觀を紹介しない。何等の抽象的倫理學を擔ぎ出さない。そして一切の不消化な美學的先入見に捉はれない。即ち要するに彼等は絶対に概念を捨ててしまつてゐる。とはいへ彼等と雖も、矢張彼等自身の先入見には捉はれてゐる。即ち彼等自身が過去に受けた教育や智識や經驗やに捉はれてゐる。けれどもそれらの者は、既に彼の人格内で完全に消化され、今は全く單純自明な趣味となりきつてゐる。そして彼等は、その單純な趣味でだけ自然を描寫するのである。彼等の眼に印象される通り——即ち彼等の趣味によつて選擇される通り——そこに概念を混じらない純粹の直感が描寫される。彼自身の眞の人格、眞の生きて輝やく個性だけが描出される。

これに反して主觀主義の藝術は、ややもすれば概念に捉はれ抽象の談理に陥入り易

い。我等にして主観的の態度を取る限り、我等の見る世界は悉く情熱の高翔せる色彩を帯びて見える。かく既に宇宙を感情によつて眺めるならば、もはやそこに冷靜なる觀照の態度はないであらう。我等の心緒は怒りに燃え、悲哀に充ち、情熱の高調によつて燃えあがる。何ぞ我等にとつて冷靜な「眞」が必要であらうぞ、我等はただ自我の情熱を、この切實なるヒューマニチイを高唱したのである。されば我等の態度は勢ひ演説的となり、倫理學の講義となり、談論的となり、主義の主張となり、そして要するに概念的の思想をしやべるやうになつてくる。(この點を注意せよ。主観的の態度はそれ自ら感情的の態度である故に、却つて抽象の理屈つばい談論に流れ易い。然るに客観的の態度は睿智的の態度である故に、却つて理屈の反面に立脚する。即ち睿智と理屈は全然本質を反對にする者であることを。)この一つの事實は、すべての主観的態度の藝術に就いて我等の常に見るところである。見よかの人道派や浪漫派の文學が、

いかにそれ自ら一つの理屈であり主義であり、尙且つまた説教されたる倫理學でさへもあるか。そして之れに對する客観主義の藝術、たとへば寫實派や自然派の文學が、いかにまた非概念的、無主義的、超道德的の純粹なる鑑賞藝術であるか。とはいへしかし主観的態度の者必しも概念に流れ易いとは限らないだらう。否それが當り前である。いかなる場合にも概念の談論に走つた藝術は好い作品でない、かくの如きはむしろ悪い方での例外と言ふべきであらう。さればあの音楽を見よ、音楽は主観的、情緒的藝術の代表的なものであるに關らず、そこには殆んど絶対に概念がない、即ちそれは一切の藝術の規範である。そして特に主観主義の藝術の規範である。

ここに於てか知るべし、かの客観主義の常識美學である「汝の主観を捨てよ」は、その實「不消化の先入見を捨てよ」又は「概念的の思想に捉はれるな」の意味であることを。そしてまた彼等のいふ「科學の如くあれ」は、科學の如く抽象的没主観であ

れといふ意味ではなくして、「科學の如く叡智的であれ——情熱に誤まれるな」の意義に外ならないことを。もしそれ「汝自身の趣味を捨てよ」に至つては、けだし全く「汝自身の趣味に徹底せよ」の言ひ損ないと判断するより他に道がない。所詮要するに客觀的な態度とは、それ自ら「眞」の把握を目的とする叡智的の態度であり、したがつてまた觀照的な純美を尊重する唯美主義（純粹趣味の藝術）の態度である。そして之れに對する主觀的な態度とは、それ自ら「善」を對象とする情緒的な態度、したがつてまた純美よりは人間の情熱を愛惜するブラグマチカル（宗敎美感の藝術）の態度に外ならない。（第三放射線 藝術の二大系統 参照）

趣味に就いて

「趣味」といふ言葉は、一般に非常に廣い意味に用ゐられてゐる。即ち甚だ融通の利く便利な言葉である。しかしその代りに内延が漠然として語義の不明瞭を免かれない。それで讀者の思想上に於ける混惑を防ぐため、ここにその一般的な語義を叙述して置かう。世間的に最も普通に用ゐられてゐる趣味の語意は「美に對する個人的な好み」である。（恐らくはそれが趣味の原意であらう、他はその轉化したものにすぎない）けれどもそれから廣義に轉じた時は、文化一般に對する「個人的な好み」を指すことがある。たゞへばセームス氏やシラー氏のブラグマチズムで主張する「哲學は趣味である」の趣味はこの場合の例である。然るにこの言葉が「實益」に對して言はれる時、それは直ちに「非實益」を指してゐる。即ち實利的な物に對して文化的意義ある物と言ひ（A）。實利的な仕事に對して道樂的な仕事を言ふ（B）。（例。A。趣味と實益を兼ねた商品。B。彼の職業は官吏であり、彼の趣味は遊獵である。）したがつてまたそれは「實感」に對する「美感」を意味してゐる。（例。「この裸體畫は實感を挑撥する」否それは趣味の對象である）又は「實感の快樂は卑しく趣味の快樂は尊い」尙またそれが抽象の「理屈」に對して言はれるとき、直ちに美的直感の「叡智」を意味する。（例。詩は理屈でない、詩は趣味である。）更にそれが興味（智的快感）に對するならば、それ自ら情的快感を指

新しき 欲情

す。(例。藝術は興味でない、藝術は趣味である。又。我等に興味や趣味やをあたへるもの。)最後に尙それはしばしばまた浪漫美に對する純美を言ふことがある。即ち情緒の美に對して叡智の美を特に趣味と呼ぶ。けだし前の論文で述べた如く、叡智の美は他の宗教や道徳と關係なき純粹の藝術美、即ち「純美」であるからだ。(例。「趣味で描いてはいけない。人間性の情熱で描け。」——浪漫派の作家から唯美派の作家への抗議として。)

このやうに「趣味」といふ言葉には、種々雑多の意味が含まれてゐる。しかし大體から言へばそれは皆「美」の本質を各方面から言ひ表はしたものにすぎない。さればどんな意味に使はれても、根本の感情は「美」の一語に歸着してしまふ。それがこの言葉の非常に便利で氣持のいいところである。それ故この書物に於ても、私はそれらのあらゆる意味でこの語を使用してゐる。讀者は夫々の場合に於て常識から判讀されんことを望む。尙以上各種の含意を表示すれば左の如し。

- 1、美に對する個人的の好み
- 2、文化一般に對する個人的の好み
- 3、實益に對する非實益の意

第二放射線

